

## 第2章 太宰府市の維持及び向上すべき歴史的風致

### はじめに

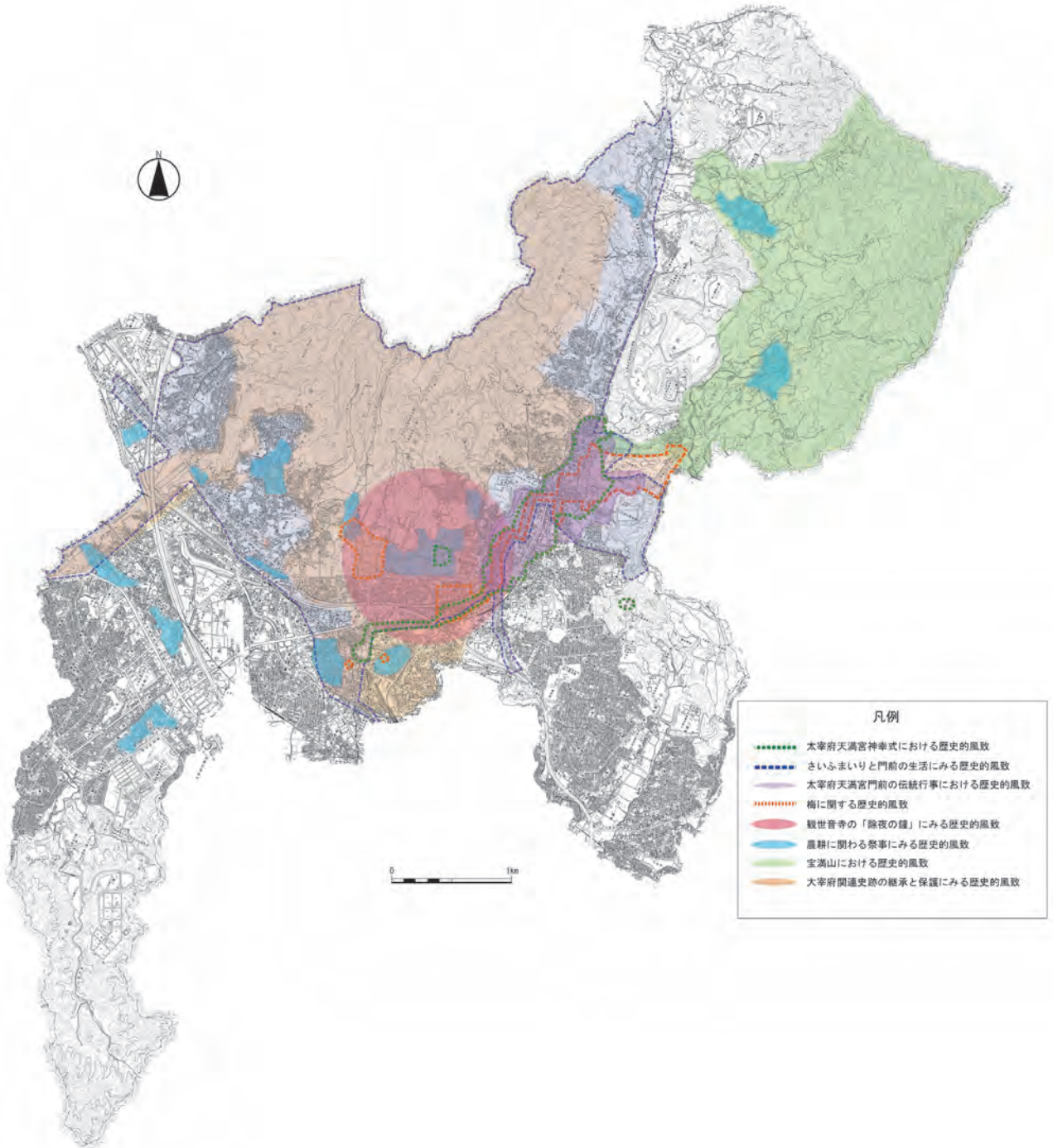
太宰府市は、古代における大宰府の設置以来、多様な人々の往来がある都市的な場として息づいてきた。特に平安時代に菅原道真が大宰府で没し、祭神として太宰府天満宮で祀られたことにより、太宰府らしい文化や信仰が生まれ、太宰府の人々にとって、大宰府関連史跡や太宰府天満宮とは密接な関係性を持つこととなる。また、市内には大宰府跡・水城跡・観世音寺・太宰府天満宮はもちろん、多様な文化財・文化遺産が残され、相互が結びつき多様な関連文化財・文化遺産群を構成し、地域の人々によって大切に継承されている。

このような歴史的な建造物と歴史や伝統を反映した活動が一体となって歴史的風致が形成されている。これを踏まえ、太宰府市の維持向上すべき歴史的風致として、以下の8つを挙げる。

- 1、太宰府天満宮神幸式における歴史的風致
- 2、さいふまいりと門前の生活にみる歴史的風致
- 3、太宰府天満宮門前の伝統行事における歴史的風致
- 4、梅に関する歴史的風致
- 5、観世音寺の「除夜の鐘」にみる歴史的風致
- 6、農耕に関わる祭事にみる歴史的風致
- 7、宝満山における歴史的風致
- 8、大宰府関連史跡の継承と保護にみる歴史的風致



岩屋城跡から見た太宰府市街地遠景



太宰府市の歴史的風致の分布図



風の車寄<sup>くるまよせ</sup>を付け、墓股<sup>かえるまた</sup>や豪華な彫刻などに桃山文化の特徴を残す。なお、本殿下には菅原道真の墓所があるという。重要文化財。

#### ・太鼓橋<sup>たいこばし</sup>

楼門南側には心字池があり、3つの橋が架かり、一般的に太鼓橋と呼ばれる。延享<sup>えんきょう</sup>2年(1745)の『黒田新統家譜<sup>くろだしんぞくかふ</sup>』によると延宝<sup>えんぼう</sup>2年(1674)に木造から石造に架け替えられた。

#### ・志賀社本殿<sup>しがしゃ</sup>

太宰府天満宮の太鼓橋横にある末社で、明治4年(1871)の『太宰府神社明細図書』によると長禄<sup>ちやうろく</sup>2年(1458)再建の境内現存最古の建物である。建物は正面1間、側面1間の入母屋造<sup>いりもやづくり</sup>の檜皮葺<sup>ひわだぶき</sup>で、正面には千鳥破<sup>ちどりば</sup>風と向唐破風の向拝<sup>むこうばい</sup>を付ける。向拝には天明5年(1785)の棟札があり、その頃に手を加えられていることが、水引虹梁<sup>みずひきこうりょう</sup>の絵<sup>え</sup>様<sup>よう</sup>などからも推測できる。重要文化財。

#### ・浮殿<sup>うきどの</sup>

境内南端にある浮殿は、かつて心字池南側にあったものを昭和になって現在地に移築したものである。社記によると妻入り切妻造の拝殿は文化年間(1804～1818)に建立された。



太宰府天満宮太鼓橋



志賀社本殿



太宰府天満宮の浮殿

### <太宰府天満宮参道の石造鳥居>

太宰府天満宮参道には、西鉄太宰府駅前から楼門まで5基の鳥居が建ち、全て花崗岩<sup>みょうじん</sup>製の明神鳥居である。各鳥居の刻銘から建立年は境内から遠い西側から順に、元禄9年(1696)、明治45年(1912)、明治28年(1895)である。太鼓橋前<sup>げんろく</sup>にある鳥居は銘がないものの、鎌倉末期～室町時代の建立と推測され、昭和36年(1961)に県の有形文化財に指定された。そして、太鼓橋を渡った楼門前に明治35年(1902)建立の刻銘のある



太宰府天満宮参道の石造鳥居

鳥居が建つ。

### <榎社>

菅原道真が住まいとしていた南館は、大宰府政庁から真南に伸びる朱雀大路沿いにあった。『安楽寺草創日記』(永禄2年(1559))によると、道真が亡くなった後の南館に、治安3年(1023)藤原惟憲が浄妙院を建立した。その後境内に大きな榎があったことから榎寺と呼ばれるようになったと伝えられる。明治元年(1868)の神仏分離により、現在は榎社と呼ばれている。境内入口には昭和3年(1928)の刻銘がある石鳥居が建ち、平成13年(2001)に建て替えられた社殿が天拝山の方向に南面して建っている。



榎社

### <どんかん道>

神幸式の行列は、先頭に護行の鐘・太鼓があり「ドン・カン」と鳴らしながら進むため、その経路は「どんかん道」と呼ばれている。その「どんかん道」は、大宰府条坊と呼ばれる古代に造られた町割の道路にほぼ重なる。大宰府条坊は太宰府市から筑紫野市にかけて広がる平地に、古代に東西南北に碁盤目のように設定されたまち区割である。平安時代の『観世音寺文書』や『宇佐大鏡』に「左郭・右郭、条・坊」とあることから条坊の存在は知られていたが、発掘調査によりその存在が確認されることとなった(『太宰府市の文化財第107集 大宰府条坊跡40』平成21年(2009)など)。河川の影響などで変化している箇所もあるが、神幸経路沿いでは発掘調査で古代の道路跡が確認されている。神幸式が開始された平安末期頃の太宰府には、大宰府政庁を北辺に据え、そこから幅15mの朱雀大路(中央大路)が南北に伸びる2km四方ほどの大宰府条坊があった。東西を条路、南北を坊路と呼び、南館にあたる榎社は右郭十二条



どんかん道



『太宰府旧蹟全図北図』文化3年(1806)(個人蔵)に描かれた「どんかん道」

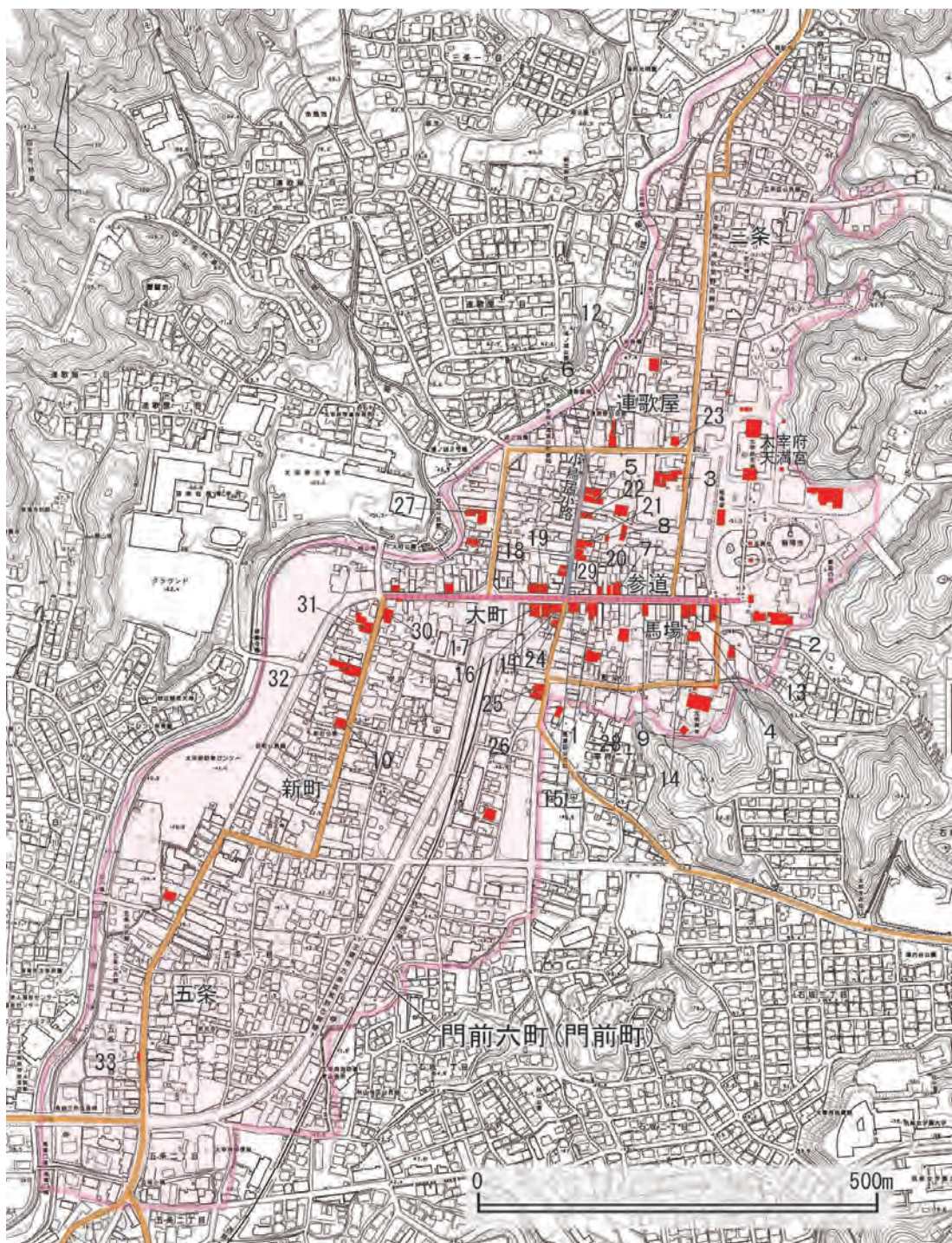




太宰府天満宮参道のまち並み



小鳥居小路のまち並み



太宰府天満宮門前町の主な歴史的建造物分布図（番号は一覧表と対応）

太宰府天満宮門前町の主な歴史的建造物一覧

番号	名称	写真	所在地	所有者	特徴	築年	築年根拠 (1972年以前建築 根拠)	番号	名称	写真	所在地	所有者	特徴	築年	築年根拠 (1972年以前建築 根拠)
1	小田家住宅		宰府 2丁目	個人	妻入りの木造二階 建、屋根は入母屋造 椼瓦葺。二階建の土 蔵もある。	明治 初期	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年	18	日田屋 (安江家住宅)		宰府 3丁目	個人	妻入りの木造二階 建、屋根は入母屋 造椼瓦葺。外壁は大 壁造。	明治 10年 (1877)	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年
2	甘木屋 (高田家住宅)		宰府 2丁目	個人	妻入りの木造3階 建、屋根は入母屋 造椼瓦葺。外壁は 真壁造。	明治 38年 (1905)	固定資産台帳 等抽出『太宰府 天満宮門前の町 並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年	19	大和屋 (佐藤家住宅)		宰府 3丁目	個人	妻入りの木造二階 建、屋根は切妻造 椼瓦葺。外壁は真 壁造。後補である が唐 破風を付す。	江戸	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年
3	古香書屋 (吉嗣家住宅)		宰府 3丁目	個人	主屋は妻入り木造 平屋建、入母屋造 椼瓦葺。門・土塀・ 土蔵を有する。	明治 末期 大正3年 (1914)	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年 調査	20	古川家住宅		宰府 3丁目	個人	平入りの木造二階 建、屋根は切妻造 椼瓦葺。外壁正面 は真壁造。	明治 29年 (1896)	太宰府市資料
4	定遠館・土塀		宰府 2丁目	太宰府 天満宮	妻入りの木造平屋 建、屋根は入母屋 造椼瓦葺。定遠の 戦艦の部材を使用。 土塀と門扉が残る。	明治 時代	昭和39年撮影 写真	21	江崎家住宅		宰府 3丁目	個人	平入りの立ちの 高い木造二階建、 屋根は切妻造椼 瓦葺。外壁は真壁 造。	昭和 初期	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年
5	小山家住宅		宰府 3丁目	個人	平入りの木造二階 建、屋根は切妻造 椼瓦葺。外壁は大 壁造。	江戸 末期	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年	22	吉村家住宅		宰府 3丁目	個人	妻入りの木造二階 建、屋根は入母屋 造椼瓦葺。	昭和 26年 (1951)	太宰府市資料
6	杉村家住宅		宰府 3丁目	個人	平入りの木造二階 建、屋根は切妻造 椼瓦葺。外壁は大 壁造。	明治 中期	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年	23	宮本家住宅		宰府 3丁目	個人	妻入りの木造二階 建、屋根は入母屋 造椼瓦葺。当初は 真壁造。	大正 10年 (1921)	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年
7	小野家住宅		宰府 2丁目	個人	妻入りの木造二階 建、屋根は入母屋 造椼瓦葺。	大正 11年 (1922)	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年	24	手島家住宅		宰府 2丁目	個人	平入りの木造二階 建、屋根は切妻造 椼瓦葺。外壁は真 壁造。	明治 38年 (1906)	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年
8	有間家土蔵		宰府 3丁目	個人	梁間1間半、桁行2 間半。屋根は切妻 造椼瓦葺。	明治 前期	『太宰府市『太 宰府天満宮門前 の町並みと民家 保存整備調査報 告書』2005年』	25	水城家店舗		宰府 2丁目	個人	妻入りの木造二階 建、屋根は入母屋 造椼瓦葺。外壁は 真壁造。	明治 中期	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年
9	不老家店舗		宰府 2丁目	個人	平入りの木造二階 建、屋根は切妻造 椼瓦葺。外壁は大 壁造。	明治 37年 (1904)	太宰府市資料	36	北崎家住宅		宰府 2丁目	個人	妻入りの木造二階 建、屋根は入母屋 造椼瓦葺。外壁は 大壁造。	明治 中期	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年
10	木村家住宅		宰府 1丁目	個人	平入りの木造二階 建、屋根は切妻造 椼瓦葺。外壁は大 壁造。	明治 中期	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年	27	菅島家住宅		宰府 1丁目	個人	平入りの木造二階 建、屋根は入母屋 造椼瓦葺。外壁は 大壁造、炭漆喰仕 上げ。	近代	昭和37年航空 写真
11	泉屋 (大野家住宅)		宰府 2丁目	個人	平入りの木造二階 建、一時期4階建に 増築されている。 屋根は入母屋造椼 瓦葺。	江戸 末期	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年	28	加納家住宅		宰府 2丁目	個人	平入りの木造二階 建、屋根は切妻造 椼瓦葺。曳尾と伝 わる。	明治 初期	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年
12	連歌屋好古亭		宰府 3丁目	太宰府 天満宮	平入りの木造二階 建、屋根は切妻造 椼瓦葺。外壁は炭 漆喰塗。	大正 15年 (1926)	福祉 「高田家住宅文 化財建造物調査 」2020	29	高木家店舗		宰府 3丁目	個人	平入りの木造二階 建、屋根は切妻造 椼瓦葺。	明治 20年 (1887)	太宰府市資料
13	小野家店舗		宰府 2丁目	個人	平入りの木造二階 建、屋根は切妻造 椼瓦葺。外壁は真 壁造。	大正 10年 (1921)	太宰府市資料	30	西山家住宅 (主屋・塀)		宰府 1丁目	個人	平入りの木造二階 建、屋根は入母屋 造椼瓦葺。外壁は 大壁造。参道側に 門と土 塀あり。	明治 前期	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年
14	松嶋屋 (徳水家店舗)		宰府 2丁目	個人	平入りの木造二階 建、屋根は切妻造 椼瓦葺。外壁は真 壁造。離れや土蔵 を有する。	明治 中期	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年、2005年	31	甯藤家住宅		宰府 1丁目	個人	妻入りの木造二階 建、屋根は入母屋 造椼瓦葺。外壁は 大壁造。	明治 前期	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年
15	松尾家店舗		宰府 3丁目	個人	妻入りの木造二階 建、屋根は入母屋 造椼瓦葺。当初は 真壁造。	大正 末期	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年	32	高田家住宅		宰府 1丁目	個人	平入りの木造平屋 建、屋根は現在切 妻造椼瓦葺だが、 当初 は寄棟造茅葺。	19世紀 中頃	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年
16	大野屋 (手島家住宅)		宰府 2丁目	個人	妻入りの木造二階 建、屋根は入母屋 造椼瓦葺。外壁は 大壁造。	江戸 末期	太宰府市『手島 家住宅文化財建 造物調査』2017 年	33	大敷家土塀・ 門		五条 1丁目	個人	土塀は切石積の基 礎に 白漆喰仕上げ。土 塀間に棟門。	明治 時代	戦前写真
17	松屋 (栗原家住宅)		宰府 2丁目	個人	平入りの木造三階 建、屋根は三階が 妻入りの入母屋造 椼瓦葺。外壁は大 壁造。	江戸	太宰府市『太宰 府天満宮門前の 町並みと民家保 存整備調査報告 書』2005年								



### ・松屋

参道の大町地区にあり、江戸期以来、松屋と号して旅館と醤油屋を営んでいた。主屋は平入りの木造三階建、屋根は3階が妻入りの入母屋造<sup>いりも やづくり</sup>棧瓦葺で、2階には下屋を四周に巡らし、外壁は大壁造<sup>おおかべづくり</sup>である。経年感と座敷意匠から江戸末期建築と推測され、3階については小屋棟木の墨書から明治12年(1879)の増築とわかる。内部は当初の姿をよく留め、西郷隆盛など幕末の志士が出入りした由緒に相応しい堂々とした風格を備えている。(太宰府市『太宰府天満宮門前の町並みと民家保存整備調査報告書』2005)



松屋

### ・大野屋

大町地区に、松屋と並んで建ち、江戸期は両替商と旅館、明治から大正期までは旅館を営んでいた。妻入り二階建の入母屋造<sup>いりも やづくり</sup>で、木鼻などの様式から江戸末期の建築と推測される(太宰府市『手島家住宅文化財建造物調査』2017年)。



大野屋

### ・甘木屋

太宰府天満宮参道の最東端にあり、かつては旅館や検番<sup>けんぱん</sup>を営んでいた。主屋は妻入りの木造三階建、屋根は入母屋造<sup>いりも やづくり</sup>棧瓦葺、各階に下屋庇を巡らす。当初の外壁は真壁造<sup>まかべ</sup>白漆喰仕上である。明治21年(1888)の墨書や明治33年(1900)の棟札が残る。平成26年(2014)には、だざいふ景観大賞を受賞した参道を代表する建造物である。



甘木屋

### ・小山家住宅

平入り木造二階建てで、屋根は切妻造<sup>きりま</sup>棧瓦葺、外壁は白漆喰の大壁造<sup>おおかべ</sup>である。建築様式から江戸後期と推測され、隣接する杉村家と共に小鳥居小路を代表的な町屋建築である(『太宰府天満宮門前の町並みと民家保存整備調査報告書』太宰府市 2005年)。



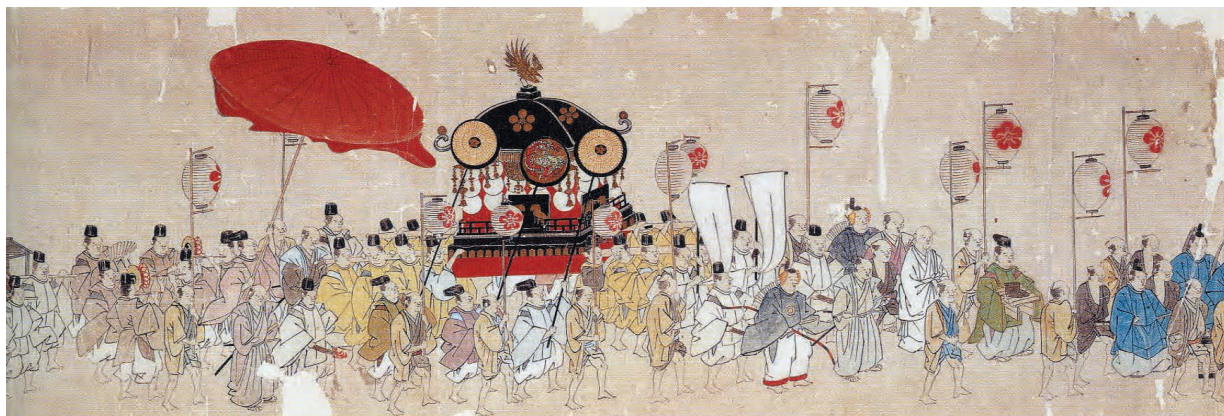
小山家住宅

### (3) 活動

#### ア、神幸式の歴史

神幸式は菅原道真の神霊をなぐさめると同時に五穀豊穡を感謝する太宰府天満宮の重要な祭りであり、昭和36年(1961)に福岡県の無形民俗文化財に指定されている。鎌倉時代の『古今著聞集』巻4によると平安時代に太宰府に赴任した大宰権帥大江匡房により康和3年(1101)に始められて以来続けられてきた祭りである。菅原道真の神霊を太宰府天満宮本殿から神輿に移して、南館跡の榎社境内にある世話になったもろ尼御前が祀られる浄妙尼社に年に一度のお礼に行くという意味も持つものである。神幸経路は南館から道真の葬列がたどった道を天満宮から逆方向に辿り往復するものである。

神幸式の内容は、室町時代後半成立と考えられる『太宰府天満宮社役年中行事』には七月晦日の注連打ちから二十四日の竟宴で竹の曲が奏されるまでが記されている。元禄16年(1703)の地誌『筑前国続風土記』にも人数をはじめ神幸の詳細が記載されており、「遠近より来て、神輿にしたがふ者多し」と賑やかな祭礼であった。また、文政4年(1821)の『筑前名所図会』では、「春秋の大祭なり。其賑ひは関西第一と唱す」と記され多くの人々を集める大きな祭礼となっていた。太宰府天満宮が所蔵する『嘉永本』と『元治本』と呼ばれる2本の『神幸式絵巻』を見比べると、神幸式の雰囲気は時期により変化しているこ



江戸時代の神幸式の様子（『神幸式絵巻元治本』元治元年(1864)、太宰府天満宮蔵）



天満宮神幸の図（『筑前名所図会』文政4年(1821)  
福岡市博物館蔵）



昭和20年代の神幸式の様子（個人蔵）

とがわかる。嘉永6年(1853)に作成された『嘉永本』には別当や文人などの社家のほかに、武士町人農民の老若男女が賑やかに供奉している様子があり、『筑前国続風土記』や『筑前国続風土記附録』(文化3年(1806))の絵図、『筑前名所図会』(文政4年(1821))にその雰囲気がよく伝わる。一方、『嘉永本』と同じ作者により元治元年(1864)に作成された『元治本』には、行列に供奉する庶民は描かれておらず、厳かに粛々とした雰囲気に表現されている。奥書によると別当大鳥居信全が格式をもった祭として安政年間に整備したことが記されている。現在は『元治本』の供奉する社家が僧形から神職に変わったほかは、ほぼ同じ行列模様で行われている。

## イ、神幸式の担い手

### 【担い手の組織】

神幸式の運営は太宰府天満宮の他に上三町(三条、連歌屋、馬場)、下三町(大町、新町、五条)と言われる門前六町と三条の分かれの松川、五条の分かれの高雄、さらに竈門神社と天満宮の二重氏子である内山・北谷が加わって行われる。天満宮は祭儀部が中心となり段取りを行う。各町には15歳から25歳の若手、26歳から40歳までの中老があり、その上は各町の祭祀係、宮世話人や総代がいる。神幸行列は神輿を舁く輿丁を中心に若手が活躍する場となっているが、最近は中学・高校の生徒の参加が多くなっている。当番町は御笠川の上流から「川流れ順」になり、注連打ちや相撲の準備を行っていく。近年当番は応援町を入れ二町で行っている。

### 【行列の構成】

神幸行列の受持ちは各町ともに、輿丁8人、太刀、弓、鉄丈、旗各1人、榊童2人と駒形童は五条より、五行の鐘・太鼓は川流れ順などが決まっているがその他は供奉割協議会で毎年割り当てを決める。

お下りでは約400人の供奉で200mほど、お上りには約700人が供奉し300mほどの長い行列となり、身にまとった平安装束がどんかんだ道を華やいだ雰囲気にする。行列は先払に始まり、五行の鐘・太鼓、諸道具に混じって竹の曲、神職、楽を奏する伶人、そして水干姿の58人の輿丁に舁かれた神輿となる。さらに宮司をはじめ神職、氏子会長をはじめとする



門前六町(門前町)の範囲



役員、太宰府市長をはじめ近隣市町長など各界の人々、最後に一般の人々が供奉する。お下りには提灯などの灯火がつき従う。お上りには先頭に多くの稚児行列が加わる。

### 【竹の曲】

神幸に供奉する竹の曲は、室町時代に起源をもち、六座（米屋（古川家）・鑄物屋（平井家）・小間物屋（安武家）・相物屋（古川家）・紺屋（船越家）・鍛冶屋（斎藤家）の座）の子孫とその関係者で代々受け継がれ、現在は保存会にて維持され、昭和35年（1960）に福岡県の無形民俗文化財に指定されている。8月になると太宰府天満宮の施設等で毎晩練習をする。稚児は一人でササラ、扇をもち舞う中心的存在である。『筑前国続風土記』には「いにしへの田楽の余風にやといふ。一人にてまふ。猿楽のうたひのことくなる、うたひ物也」とあるものと一致している。楽器の締太鼓は室町時代のものが伝わり、鼓胴に文禄元年（1592）の修理墨書銘が残されている。



竹の曲

## ウ、神幸式の流れ

### 【神幸までの行事】

各行事は明治6年（1873）の新暦に移行後も旧暦の8月（新暦では9月）に行っていたが、新暦での日が一定しないため、明治44年（1911）から行事日程も新暦に移して9月に実施されるようになった。7月晦日の注連打ちが8月末になり、現在は月末から二週遡った土・日曜日に注連打ち、最終土・日曜日に奉納相撲などが行われる。注連打ちにつづき天満宮の南にある高尾山（標高151m）の大行事塔前にて祈願祭が行われ、境内で行われる奉納相撲とともに、神幸式の安全無事を祈願する。

8月のうちに注連の準備を終え、9月に入ると注連はお祓いを受け、神幸の道を行列し

月日	行事	場所	内容
8月最終前土日曜日	注連打ち	境内絵馬堂	各所に張る注連を当番町が作る。
8月最終前土日曜日	祈願	高尾山大行事	神幸式の無事と執行を祈願。
8月最終土日曜日	注連打ち相撲	境内絵馬堂横	奉納相撲・豆すもうとり。
9月1日	注連おろし		本殿で祓いを受け榎社周辺の注連を張る。
9月11日	お道具出し	御宝庫	護行の鐘を合図に境内の茶店の人・神職により使用する道具を出す。
9月14日	別火餅搗き	天満宮	六町の若手が参籠して別火餅を搗く。
9月15日	潮井取り	紫藤の滝(天拝山麓)	早曉に潮井を取りに行く。
9月18日	注連立て	馬場参道休奥所ほか	各所の注連立て。
9月20日	別火・潔斎		宮司が午後より別火・潔斎に入る。他神職は21日から。
9月21日	大祭始祭	本殿	
9月22日	お下りの儀	天満宮から榎社	午後8時に御発輿。
9月23日	お上りの儀	榎社から天満宮	午後3時に御発輿。
9月24日	献饌祭	天満宮	
9月25日	千燈明	心字池周り	午後8時に一斉に灯明に点火。

神幸式に関わる行事

て榎社に向かい、注連を張る。残暑のなか榎社に張られた注連を見て秋が近いことを人々は知る。11日には行列の道具が神苑の茶店の人々と神職により御宝庫から出され、境内の絵馬堂や回廊に置かれ、神幸前日までに点検・組立などを行う。14日は六町の若手が天満宮に参籠して別火（穢れを他にうつさないように食事炊飯の火を別にすること）で餅を搗き、翌日早暁に天拝山麓の紫藤の滝に、清めの砂であるお潮井を取りに行く。18日には参道の休輿所などに注連立てが行われ、門前でも祭らしい雰囲気となる。休輿所の注連立ては、大きな孟宗竹が使われ高いところに白い四角の布を張る。これを「もろ尼御前のへこ（腰巻き）」と言い、追手に追われた道真をもろ尼御前が白に隠し自分の腰巻きをかけて匿った伝承を反映している。宮司は神幸の日の二日前から、神職は神幸の日の前日から心身を清める潔斎に入り、別火して過ごし、神幸の日の初日に備える。

【お下り】



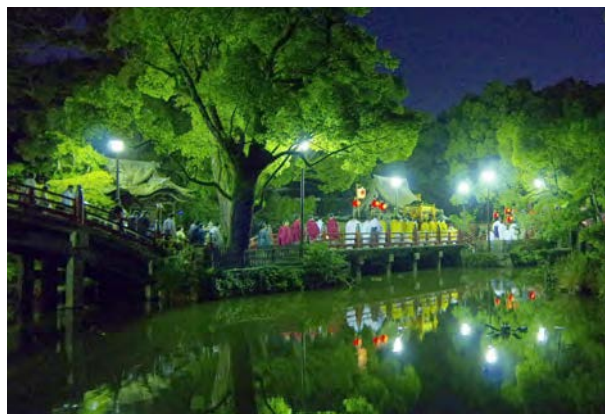
高尾山の大神事塔



榎社前に張られた注連

神幸初日は、神輿が太宰府天満宮から榎社に向かうお下りである。午後7時より護行の鐘と太鼓の「どん・かん」がゆっくりとした調子で打ち鳴らされ、神輿が天満宮から榎社へ向かう神幸の開始を告げる。多くの人が見守る中、本殿に安置してある道真の神霊を神輿に移す遷御祭、出御祭が始まる。神職の「メッソー（滅灯）」という声とともに本殿から回廊・楼門すべての灯りが消され、真闇のなかで、神霊は宮司により本殿から神輿に移される。移ると再び点灯され供揃いの後、輿丁のお祓いをし、諸道具を受持ちに渡す。神輿は「お前おあと静かにおもりまして」という京風ことばの掛け声で輿丁に昇かれて静かに移動を始める。神輿は黒漆と金の飾り金具の取り合わせが鮮やかで、四隅に吊るされた瓔珞や、垂幕に吊下げられた鏡などが灯りに反射して夜に映える。

神輿は大正3年(1914)に再建された楼門をくぐり、南下して心字池にかかる太鼓橋を渡って行く。この橋は延宝2年(1674)に福岡藩主黒田光之により木橋から石橋へ改修されたもので、中島には文化2年(1805)建立の今王社や長禄2年(1458)建立で重要文化財である志賀社がある。橋を渡る際には神輿が傾かないよう上下三町それぞれから一人選ばれた者が「お前お静かにお上げまして」「お後お静かにお下げまして」など優雅な京風ことばで誘導する。輿丁は掛け声にしたがい神輿の高さを水平に保って昇っていく。太鼓橋を渡り終わると、鎌倉時代末



太鼓橋を渡る行列

に建てられた石造鳥居（県指定有形文化財）をくぐり、現宮司邸である延寿王院えんじゅおういんの前を西へ折れ、参道のまち並みを進んで行く。参道中程の石造鳥居手前しよさんちやうにある「もろ尼御前のへこ」がかかる休輿所にて一度留まり旅装を整える。その後、神域の境界を示す斎垣いがきがあった一の鳥居をくぐり、神輿は江戸期のまち並みが残る大町を通り、下三町の通りを大町一新町一五条とゆっくりと神幸する。道中では竹の曲たけはやしの一行による「道楽」みちのがくが奏され、どんかん道沿道の家は献灯の提灯をあげ行列を迎える。

幸府宿の境である五条口近くに達した神幸の列は、六座の米屋座であった古川家旧宅跡でその歩みをいったん止める。同家には家運が傾いた際に夢現に現れた天神（道真）が庭の梅を見よというお告げにしたがい見てみると黄金が入った巾着が掛けてあったと伝わる「金掛け梅」の伝承があり、現在も古川家の人々が揃いの法被と提灯でお出迎えをして感謝の気持ちを表している。同地にはその故事により金掛天満宮かねかけてんまんぐうが祀られている。

行列は幸府宿を抜け古代大幸府条坊のまち区割が残る通りを進んでいく。そして、エノキの大木の根元に祀られた血方持観音ちけもちかんのんのそばを通るとき、行列は観音にはばかり楽を止めて進む。一方で、観世音寺では、菅原道真が配所ふで賦した詩「観音寺只聴鐘声（観音寺はただ鐘声を聞く）」にちなんで国宝の梵鐘が撞かれる。また、道真が天に無実を誓ったと伝えられる天拝山山頂てんぱいざんでは地元の人々により迎え火が焚かれる。暗闇の中、荘厳な鐘の音と遠くに煌めく炎によりどんかん道のみならずまち全体が神幸式の雰囲気となる。

榎社は普段はクスなどの大木のこんもりとした緑に囲まれた静かな社である。かつては神仏習合の地であり、地元では今も榎寺と呼び親しまれ子供たちの遊び場となっているが、神幸のときは人々が集い行列を迎えるにぎやかな空間となる。そのようななか神輿は榎社に到着する。神輿は天拝山



「もろ尼御前のへこ」の下に留まる神輿



どんかん道沿道の献灯



参道を進む神輿



どんかん道を進むお下りの行列

の方を向く石造鳥居（昭和3年（1928）建立）から入り、まず行宮の後方にあるもろ尼御前を祀る浄妙尼社の前に着輿する。浄妙尼社におごそかに奉幣ほうへいが行われる。浄妙尼社の固く閉ざされた厨子ずしの扉もこの日ばかりは開けられ、いつもは頭からすっぽり覆っている綿帽子も取られて、立膝をしたもろ尼御前像が姿を現わしている。もろ尼御前の子孫である権藤家により、社に幕が張られ、お供えをし、灯明が灯されている。権藤家については江戸時代後期の地誌『筑前国続風土記拾遺』にも「此頓宮は室の尼の社人権藤氏これを掌る。…室尼は権藤が祖なりという」と記されている。

午後10時半ころ行宮に着輿すると奉幣ほうへい、献饌祭けんせんさいが行われ一晩留まる。当日は神職が宿直をしている。行宮は本殿と拝殿に渡殿を設け連続した外観であるが、お旅所であるため通常は何も祀られておらず、御幣ごへいが置かれているだけである。

#### 【お上りのぼり】

神幸の二日目は、榎社から神輿が天満宮に戻るお上りである。午後1時半から行宮神輿の前で倭舞やまとまいを奏上（奉納）することから始まる。4人の御巫子みかんこによる神楽舞である。笛とカイグリかね（鉦）の調べに乗って、舞装束どうじよの童女が榊や鈴を持ってゆっくりと舞うのを、人々は開いた扉や連子窓から鈴なりに覗いている。その後、供揃えともぞろ、出御祭しゅつぎよを行い、午後3時に発輿となる。このころになると秋分の日でもあり秋の陽のなかの境内は見物人で埋まる。

榎社を出る前に鳥居の中から天拝山に向かって権宮司が祝詞を声に出さずに奏上する「天拝秘法」が行われたのち神輿は榎社を出発し旧宅なんかん（南館）ともろ尼御前を後にする。経路はお下りと同じであるが、日中なので高張提灯などの灯火具は供奉くぶしていない。どんかん道を通り五条口を入った旧古川家前で再び出迎えを受け、大花車や幼稚園児らによる稚児行列を加えさらに華やかになった行列は、参道を見物人をかき分けるように進むがすぐに本殿へ戻らず、延寿王院の前を南に折れ一旦浮殿に入る。浮殿



浄妙尼社前に到着した神輿



榎社本殿での祭事の様子



榎社お上り（天拝秘法）



前の舞台上で徐々に陽が落ちる中、竹の曲たけ はやし保存会による「御供上げ」の曲を奏する。続いて舞われる倭舞やまとまいが終わるころには周囲は宵闇へと移っている。

午後6時半ごろから神輿は暗くなる中を発輿し、ゆっくりと太鼓橋を渡り午後7時頃に本殿へ到着する。あたりが本闇に包まれたところで、お下りのときと同様、滅灯がなされ宮司により神霊は輿から本殿内陣かんぎよへと還御たけ はやしされ、神幸の無事終了を祝う竟宴きょうえんが行われ竹の曲が舞われる。

### 【千灯明せんとうみょう】

25日夜には、神霊を慰める千灯明が心字池や太鼓橋周辺で門前六町の若手によって灯される。各町で分担場所を決め、綱を張り針金を付けろうそくを立て準備をする。午後8時に若手祭典部長の号令で一斉に灯明を灯す。灯すのが遅れたところはきつく叱られるためみんな緊張して点灯する。多くの灯明が太鼓橋の朱と樟葉の緑を心字池の水面に照らし、心字池には舞台がしつらえられ巫女による神楽「悠久の舞」などが奏上（奉納）され、幽玄な雰囲気広がる。



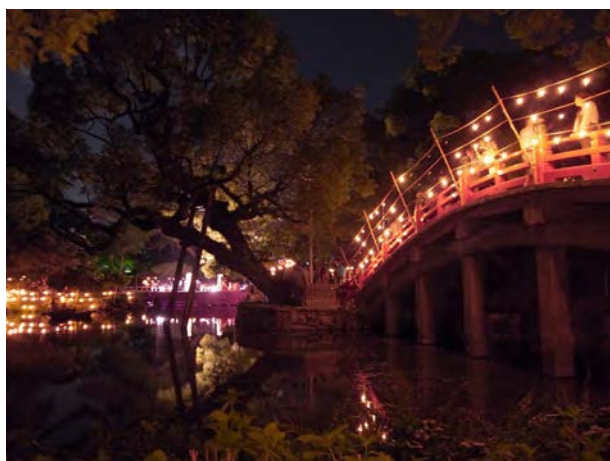
血方持観音前を通るお上りの行列



浮殿前での倭舞



本殿に戻ってきた神輿



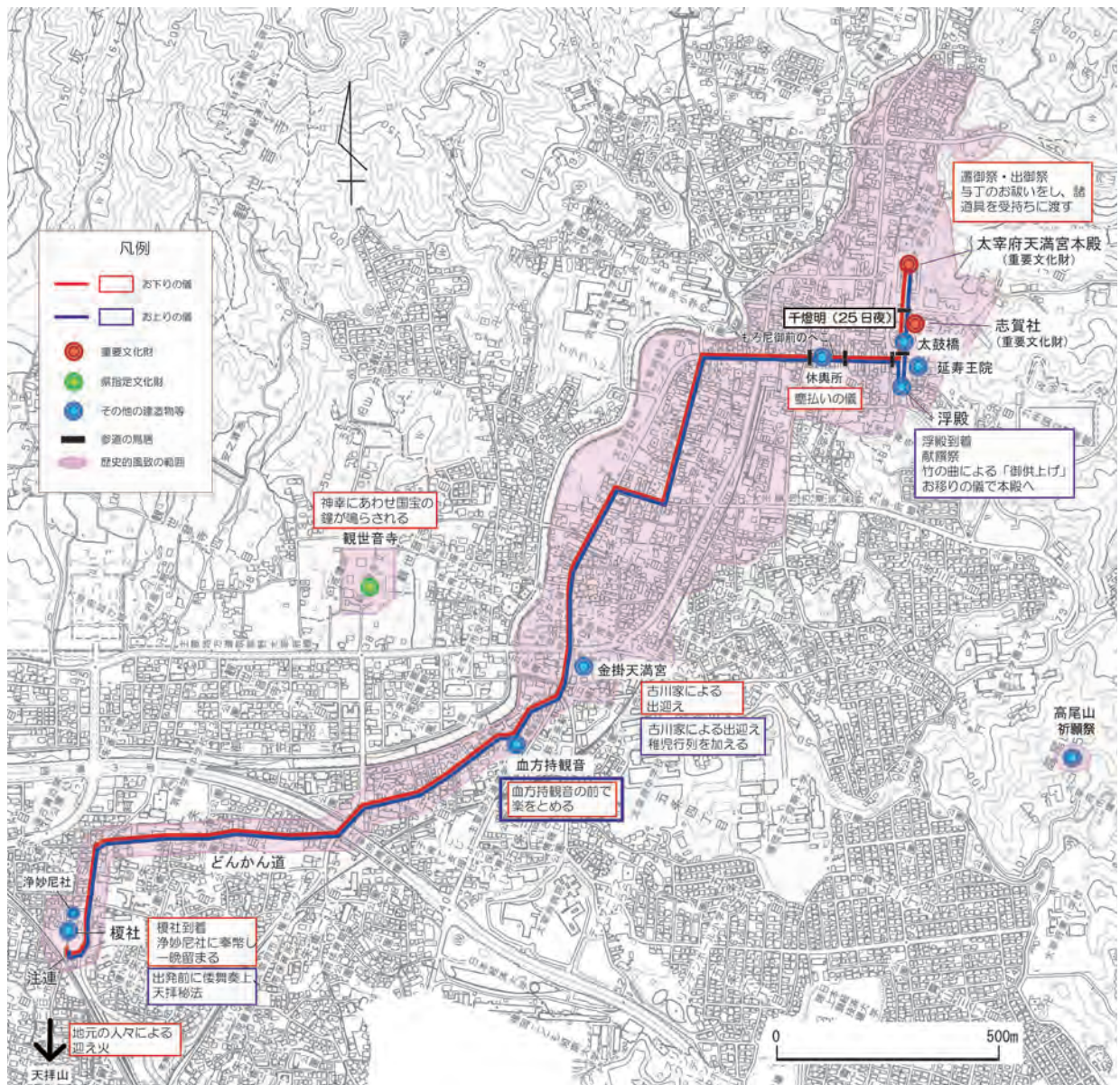
千灯明



本殿前での「竹の曲」

#### (4) まとめ

神幸式は、太宰府天満宮と門前の人々を中心に、道真の配所で逝去の地と伝わる榎社、道真の葬送の道であり古代のまち区割を継承しているどんかん道、またその墓所である太宰府天満宮で今もなお続けられている。「ドン・カン」の音と共に厳かな雰囲気が進む行列は、どんかん道沿いの家に掲げられた献灯の提灯に迎えられ、天神信仰と太宰府の人々とまちのつくりが密接に関係していることが窺え、秋の太宰府の風情を感じることができる歴史的風致である。



「太宰府天満宮神幸式における歴史的風致」の範囲と神幸式のルート

## 2 さいふまいりと門前の生活にみる歴史的風致

### (1) はじめに

さいふまいりは、文道の神、学問の神として信仰を集めた太宰府天満宮へ参詣するとともに、太宰府周辺の名所や旧跡をめぐり、歴史や文化に触れ楽しむ遊山の色彩を色濃く帯びる活動である。さいふまいりについては、<sup>れんがしそうぎ</sup>連歌師宗祇の『筑紫道記』(文明12年(1480年))にも記載されるなど、室町時代から記録に見ることができ、江戸時代からは天神信仰の流布と共に民衆も太宰府を訪れるようになった。現代でも太宰府天満宮境内や参道は、一年を通して参拝客で賑わう。

### (2) 建造物等

#### <水城跡みづきあと>

水城跡は天智天皇3年(664)に大陸からの侵攻に備えて国土防衛のために地峡を塞いだ長さ約1.2km、幅約80m、高さ約9mの長大な土塁である。室町時代の連歌師宗祇が「大きな堤あり。いはばよこたはれる山のごとし」(『筑紫道記』文明12年(1480))と記した緑に覆われた土塁は、現在も存在感を示し太宰府の入口であることを感じさせる。特別史跡。



水城跡

#### <四王寺山しおうじやま(大野城跡)>

大野城は白村江の戦い敗戦後、百済はくせんこうの亡命者の指揮のもと築造された城で、標高410mの大野山の尾根に沿って土塁を巡らし、谷部には石垣が築かれている。城門は9ヶ所で、城内各所には礎石建物跡が約70棟確認されている。奈良時代には四王院しおういん(四王寺)が創建され、大野山はのちに四王寺山と呼ばれるようになった。『万葉集』でも山上憶良やまのうえのおくらが「大野山 霧立ちわたる 我が嘆く おきその風に 霧立ちわたる」(巻5-799)と詠ったのをはじめ、多くの歌に詠まれた。太宰府を訪れる際は、どの場所からも望むことができ、山裾に点在する各名所の借景的存在となっている。特別史跡。



四王寺山

### <筑前国分寺跡・国分寺>

筑前国分寺は、聖武天皇の勅願により全国に造られた国分寺のひとつで、平安時代末期には廃絶し、江戸時代になって、その跡地に龍頭光山国分寺が建立され、現在に至る。境内の周辺には、筑前国分寺跡の礎石が残り、国の史跡である。



龍頭光山国分寺本堂

### <都府楼跡（大宰府政庁跡）>

都府楼跡は古代に設置された地方最大の官衙、大宰府の中心である政庁の跡である。菅原道真が配所の南館で賦した「不出門（もんをいはず）」中の一節「都府楼纒看瓦色（都府楼はわずかに瓦色を見る）」から「都府楼」と称されるようになった。司馬江漢は「都府楼の跡と云。何にせよ、すざましき殿ありと見えたり」（『江漢西遊日記』天明8年（1788））と田中に散在する礎石に感心してい



都府楼跡

る。現在は北の四王寺山、西の蔵司、東の月山の緑に囲まれた広い空間に礎石が点在し、観光客や市民が思い思いの時を過ごす空間である。特別史跡。

### <戒壇院>

奈良時代に来日した唐僧鑑真は、僧侶の規範である戒律とそれを受ける儀式（受戒）を伝えた。観世音寺の西側には、受戒の場である「戒壇」が置かれ戒壇院とされた。江戸時代には観世音寺から独立し現在に至る。境内は本堂を中心に鐘楼や庫裡が建ち、南側に山門と土塀を造る。江戸期には山門を入ると楼門があったが、現在は礎石だけが残る。



戒壇院本堂・鐘楼

#### ・本堂

本堂は切石の基壇上に建てられ、下層は5間、上層は3間の重層入母屋造で、屋根は本瓦葺、正面には1間の向拝が付く。寛文9年（1669）頃に黒田家臣鎌田昌勝が建立し、延宝8年（1680）に豪商天王寺屋浦了夢が改築したものと伝わる（『福岡県の近世社寺建築』1984年による）。県指定有形文化財。

## ・鐘楼

石積基壇上に建つ入母屋造の本瓦葺の建物で、建物下半には袴腰という着物の袴のような台形状の腰板が張られている。宝永元年（1704）建築（棟札より）。県指定有形文化財。

## ＜観世音寺＞

観世音寺は天智天皇が母である斉明天皇を供養するために飛鳥時代に発願した寺である。現在はクスノキの並木道を抜けると、江戸期再建の講堂と金堂があり、かつて威容を誇っていた五重塔の心礎が木々の間にひっそりと残る。講堂周囲には平安時代の礎石も並んでおり、国の史跡に指定されている。



観世音寺

さらに鐘楼には国宝の梵鐘が釣り下がり、昭和34年（1959）に完成した寄棟造の宝蔵には、重要文化財の仏像14体が安置され、往時の規模や歴史を今に伝える。観世音寺から戒壇院にいたる緑に囲まれた境内は、古刹の雰囲気漂わせ、来訪者は木陰の中を散策している。

## ・講堂

入母屋造、本瓦葺、平面は本体3間に裳階四面形式で、南面して建つ。棟札より元禄元年（1688）の建築である。県指定有形文化財。

## ・金堂

境内西側にあり東面して建つ。入母屋造本瓦葺で、正面5間、側面4間で、身舎柱は八角柱で礎盤を置き、庇は角柱を用いている。明治初期の『福岡縣地理全誌』によると、寛永8年（1631）建築されたものという。県指定有形文化財。

## ＜太宰府天満宮＞

菅原道真は遺言により大宰府に葬られることとなった（『北野天神御伝』平安時代）。遺骸を乗せた牛車が南館より北東方向へ進んだが、牛車が突然動かなくなったため、そこを墓所と定めて埋葬した（『北野天神縁起絵巻』鎌倉時代）。その数年後に門弟の味酒安行によって霊廟が建築された。墓所は信仰の場となり、現在の太宰府天満宮へと継承されてきた。



太宰府天満宮

## ・太宰府天満宮本殿

宝永6年（1709）の『筑前国続風土記』によると、戦国時代末に焼失したため、天正19年（1591）に小早川隆景によって再建された。本殿は五間社流造の檜皮葺で、正面に大唐

破風の向<sup>ご</sup>拝<sup>はい</sup>が、左右両側にも同じような唐破風の車寄<sup>かえるまた</sup>を付け、<sup>かえるまた</sup>臺股や豪華な彫刻などに桃山文化の特徴を残している。本殿前には参拝者の列ができ、本殿内では祭事はもちろん参拝者のお祓いが毎日行われている。重要文化財。



太宰府天満宮本殿

### ＜光明寺＞

光明寺は太宰府天満宮の南方にある臨済宗の寺院で、文永10年(1273)、渡宋天神ゆかりの地として鉄牛円心により開山したと伝えられている。境内には江戸期建築の本堂(臺股の墨書より安政3年(1856)建築)・山門・観音堂と白壁の土塀等が残る。本堂の前後にある庭園は、昭和32年(1957)に作庭家重森三玲によって作庭されたもので、県指定名勝となっている。



光明寺

### ＜藍染川と梅壺侍従蘇生碑＞

「(藍)染川」は謡曲「藍染川」の伝説の舞台であり、細川幽齋は天正15年(1587)の『九州道の記』で「染川の里人に尋ねて見に行き侍るに、思ひしには変はりたる小川の浅き流れなり」と記し、文政4年(1821)の『筑前名所図会』には藍染川の中に建つ碑が描かれ、人々は歌枕に惹かれて現在も藍染川と梅壺侍従蘇生碑を訪れる。



藍染川梅壺侍従蘇生碑と『太宰府廿四詠』(福岡市博物館蔵)に描かれた染川

### ＜榎社＞

菅原道真が住まいとしていた南館跡<sup>なんかん</sup>に、治安3年(1023)藤原惟憲が浄妙院を建立した『安楽寺草創日記』(永禄2年(1559))。その後境内に大きな榎があったことから榎寺と呼ばれるようになったと伝えられる。明治元年(1868)の神仏分離により、現在は榎社と呼ばれている。境内入口には昭和3年(1928)の刻銘がある石鳥居が建ち、平成13年(2001)に建て替え



榎社

られた社殿が天拝山の方向に南面して建っている。

### <三浦の碑>

江戸時代宰府宿への出入口は4ヶ所あった。そして、日田街道から参詣道を経由し御笠川を渡る高橋口と宇美方面から至る山上口（三条口）は、二見ヶ浦（伊勢）、和歌浦（紀州）、箱崎浦（筑前）のお潮井で清めた。その記念として高橋口には文政13年（1830）の刻銘のある「奉納三所塩食碑」を建て、



奉納三所塩食碑



三浦潮井碑

山上口（三条口）には明治12年（1879）の刻銘のある「三浦潮井碑」を建立している。これらは「さいふまいり」が盛んだった頃のもので、参詣者はこの場所で身を清めていた。

### <関屋の石造物>

関屋は日田街道と太宰府天満宮参詣道の分岐点で、この分岐を南へ御笠川を渡れば日田街道、東に鳥居をくぐれば参詣道となり、「さいふまいり」の面影を見ることができ。なお、各石造物の建立年は刻銘による。



関屋の鳥居・道標・潮齋台・石灯籠

#### ・石造鳥居

文久2年（1862）に藩主黒田斉溥により建立された花崗岩製の明神鳥居である。

#### ・道標

鳥居の傍らには2基の道標があり、元禄4年（1691）刻銘のものは「是ヨリひがしさいふ参詣道」とあり、享和2年（1802）刻銘のものには「天満宮東従是二十五丁」とある。

#### ・潮齋台

文久2年（1862）に設置され、参詣者はここに清めの砂を置き鳥居をくぐった。

#### ・石灯籠

享和2年（1802）天満宮900年大祭に合わせて、参詣者向けに1基建立されたものである。

### <太宰府天満宮門前のまち並み>

太宰府天満宮門前町は、江戸時代には筑前二十一宿のひとつ宰府宿となった。天保11年（1840）の『博多太宰府図屏風』（69頁）にみるように草葺屋根の建物が建ち並ぶまち並みだったが、江戸後期から大正時代にかけて、参道周辺は、瓦葺建物が建ち並ぶようになった。現在でも、新町、参道、小鳥居小路などに白壁造の瓦葺建物が残る（48頁参照）。

### (3) 活動

#### ア、さいふまいりの歴史

太宰府天満宮への参詣は、平安時代より都からの官人や文人などにより行われていたが、江戸時代からは「さいふまいり」と呼ばれ庶民にも浸透していった。さいふまいりの「さいふ」は太宰府のことであるが、地名の「宰府」と、『本朝文粹』『百練抄』『菅家後集』など平安時代の文書に現れる都から西にある都督府（行政機関の中国名）があった地である「西府」の意味も含んでいた。戦国時代末期の『九州の道の記』（木下長嘯子、天正20年（1592））には「宰府といふところは…拝み奉らんと詣でて。此方彼方名所ども見ありきしに…見所多かりけり」と記され、200年後の江戸時代の絵師兼蘭学者である司馬江漢も訪れ「太宰府には古跡多し」（『江漢西遊日記』天明8年（1788））としている。特に江戸時代後期には「お伊勢参り」と同じように庶民が講（同じ目的の人々の団体）を作り団体で訪れる旅が流行し、多くの人々が太宰府を訪れている。太宰府は江戸時代、黒田藩の筑前二十一宿のひとつに指定され、主要街道である長崎街道や日田街道からの参詣道が整備されていた。長崎街道からは、太宰府に最も近い山家宿より日田街道を經由し高尾を越える道（A）や二日市宿を經由し白川や榎社の名所を見ながら「どんかん道」（B）を通って南から宰府宿に入るルートがあった。また、小倉側の内野宿から米の山峠を越えて東からたどる道（C）もあった。一方、日田街道は幕府直轄地の日田から九州の主要地へ向かう街道で『豊後国志』（享和3年（1803））に

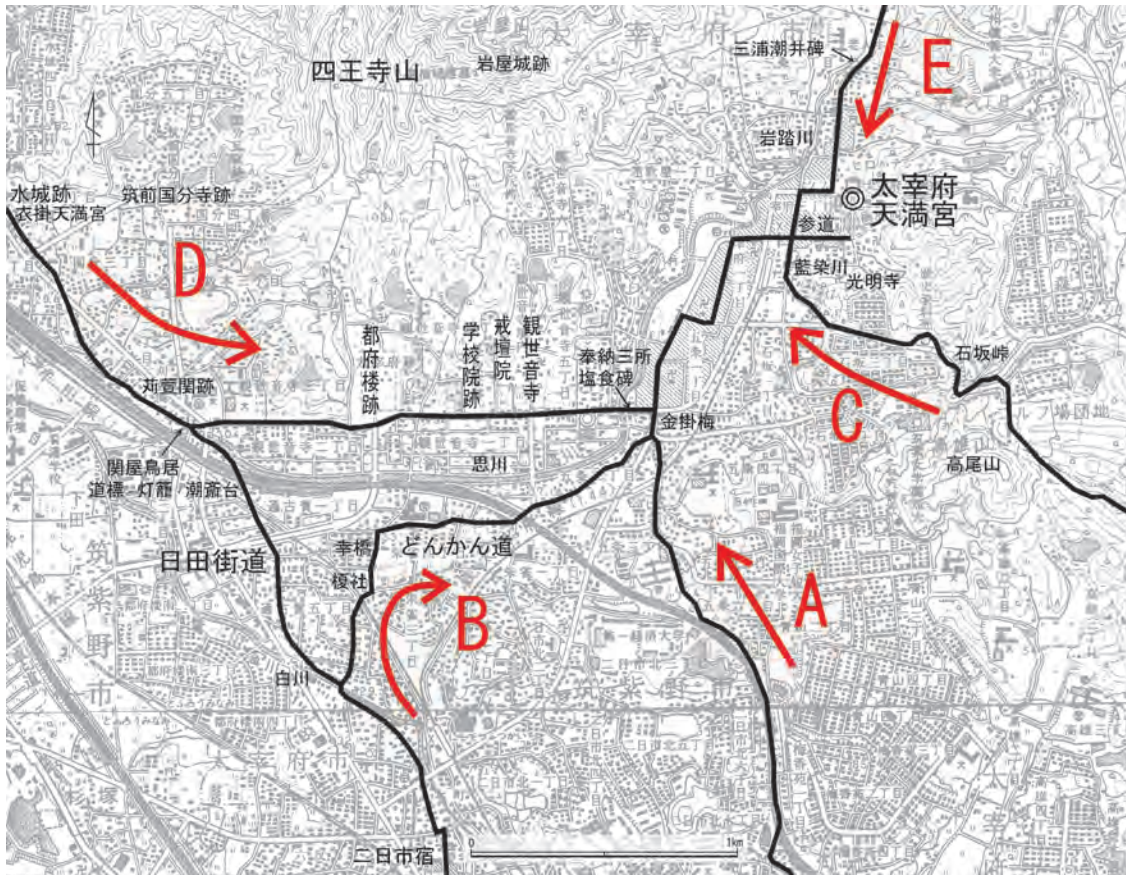


江戸時代の太宰府天満宮境内  
（吉嗣梅仙『太宰府天満宮境内絵図』1867年 太宰府天満宮蔵）



江戸時代の主な街道の概略図





近世の主な参詣道

は6本が記録されている。そのうちの一本が「筑前国幸府路・福岡城路」である。北からのさいふまいるの人々はこの道を通り、その道中に水城跡や周辺の衣掛天満宮や苅萱関跡に立ち寄りながら関屋の分岐に至る (D)。

日田街道と参詣道の分岐に位置する関屋には、石造鳥居のほか道標や石灯笼などが建ち、名古屋を出発し京、大坂を經由して九州に来た吉田重房は人の往来が多かったことを「此所（関屋）は肥前。肥後。薩摩。其外の国々より京江戸へ通ふ官道（おほどう）なれば。往来の人のしげきこと東海道も同じといへり。」（『筑紫紀行』文化3年（1806））と記している。また、北側の宇美方面からも山間の小道が参詣道となっていて、幸府宿の入口には三浦潮井碑が残る (E)。

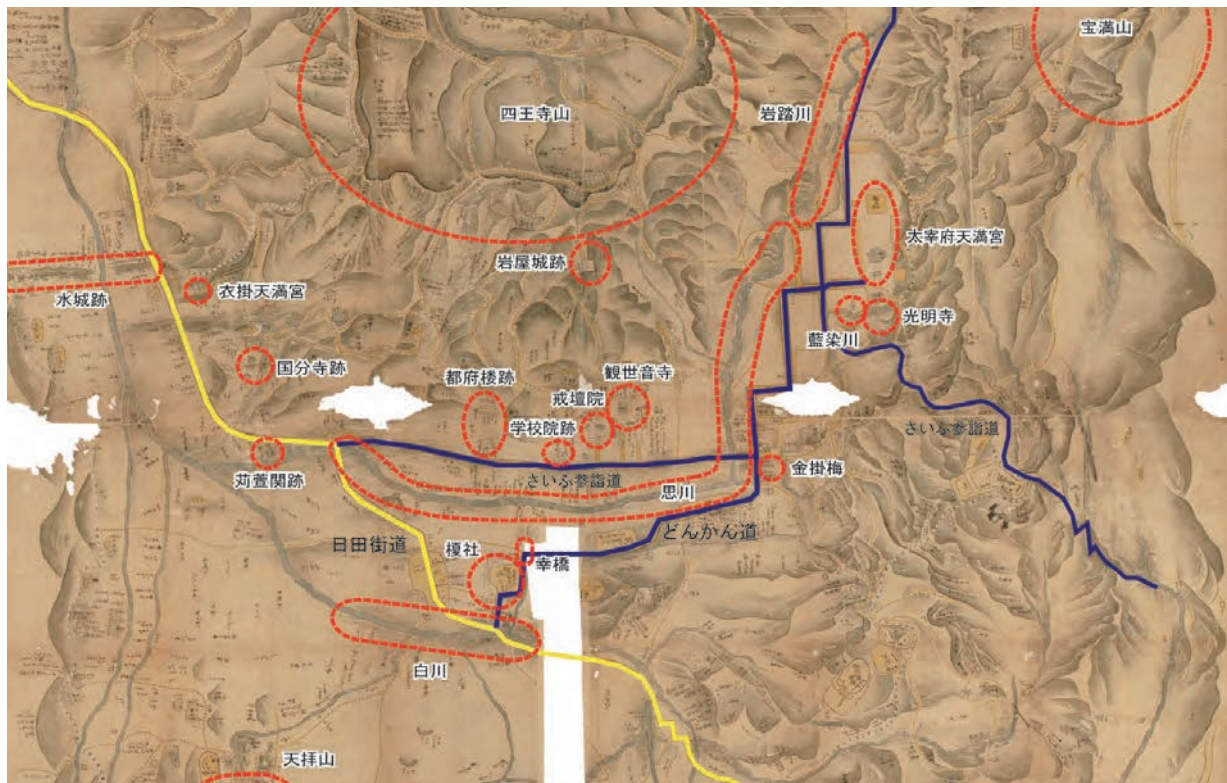
当時のメインルートのひとつである関屋を經由し天満宮に向かう参詣道には、四王寺山を背景に都府楼跡、学校院跡、戒壇院、観世音寺な



苅萱の関跡



幕末頃の関屋の賑わい（背景は四王寺山）  
（江戸末期『名勝画譜』国立公文書館蔵）



さいふまいるの名所地と参詣道（『太宰府旧蹟全図北図』個人蔵、一部加筆）

書名	年代	名所																				
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
筑紫道記	文明12 (1480)			○		○	○		○	○				○	○			○		●	○	
九州道の記	天正15 (1587)					○			○	○								○		●	○	
九州の道の記	天正20 (1592)													○				○				○
九州下向記	慶長3 (1598)	●				○	○		○				●	○								○
日本行脚文集	貞享2 (1685)	●				○	○		○					○				○			○	○
長崎行役日記(往路)	明和4 (1767)						●		○	○		○	●							●	○	
西国筑紫紀行	安永2 (1773)					○																○
西遊雑記	天明3 (1783)	○	○			○	○		○					○						○		○
金谷上人行状記	天明6 (1786)			○		○	○		○	○				○								○
江漢西遊日記	天明8 (1788)								○	○												○
つくしの道の記	寛政2 (1790)				○							○		○	○	○						
太宰府紀行	寛政8 (1796)						○		○	○				○	○							○
筑紫旅行日記	享和1 (1801)													○				○				○
筑紫旅行	文化3 (1806)	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○
狂歌西部紀行	文化4 (1807)	○				○	○		○									○	○			○
九州九峰修行紀行	文化10 (1813)					○	○		○												○	○
西遊漫記	文政3 (1820)													○							○	○
薩陽往返記事一回往路	文政11 (1828)					○	○	○	○											●		○
筑紫日記	文政13 (1830)	○		○		○	○		○	○					○					●		○
薩陽往返記事二回往路	文政13 (1830)					○	○		○													○
西遊日記	天保2 (1831)					○	○		○	○				○								○
長崎日記	天保4 (1833)			○		○	○		○	○				○								○
薩陽往返記事六回往路	天保8 (1837)					○	○		○													○
安楽寺詣日記	安政4 (1857)																			●		○
筑紫日記	安永7 (1860)					○												○	○			○
西遊日記	慶応1 (1865)			●		●		●					●							●		○
筑紫の道の記	近世	○	○			○	○		○	○				○	○						○	○

紀行文に記載されている「さいふまいる」の立ち寄り所一覧

(●は望見のみ)

どの名所が並び、多くの参詣者はそれら名所に立ち寄っている。都府楼跡に立ち寄った柳田玄策は『西遊日記』（天保2年（1831））に「今はところどころに大なるはしらいし（柱石）残れりける所も、すきたがやされて田畑なり」と、田畑の中に礎石が並んでいる様子を記している。参詣道はお潮井で清められた宰府宿の西の入口である高橋口に至り、宰府宿のまち並みへと入っていく。さいふまいりの人々は宰府宿の宿屋や社家の宿坊などに宿泊しながら、太宰府天満宮参詣の前後に、光明寺などの周辺の旧跡はもちろん、『伊勢物語』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』などの和歌の歌枕に登場する藍染川、思川、岩踏川、白川などの名所も見聞している。

そして、さいふまいりは天満宮への参詣となる。参道から延寿王院の前を北へ折れると「反橋高うして二つあり。…池のめぐりには千万株の梅の林をなせり。覚えず西湖の境に来たるやと覚ゆ。楼門に入るほどかうかうしくて（神々しくて）。左右の回廊いさぎよし。名におふ飛梅苔むして」（『筑紫道記』文明12年（1480））と記された風景が今も広がっている。また、「かくて御本殿の御前にまゐりて頓首再拜」（『筑紫紀行』文化3年（1806））したのち、回廊にある授与所で御守りを受ける姿や「初穂持参、梅守銀一両宛、札守十二銅宛」（『太宰府紀行』寛政8年（1796））としていた江戸時代のさいふまいりの様子は、現代と同じである。

江戸時代後期には『筑前名所図会』（文政4（1821））などが執筆され、『博多太宰府図屏風』（天保11年（1840））のように博多から太宰府までの賑わいが屏風の画題にもなるほど、さいふまいりは定着したものであった。近代になるとさいふまいりに訪れた人々に土産物として案内書や絵葉書とともに紀行文も発行され、天満宮周辺を中心に太宰府の名所も取り上げられている。これらさいふまいりの情景を描いた多くの絵画資料から、参詣者の多様な姿が見てとれる。併せて参詣者が歩く道路に開くように戸口を解放した建物が多くみられ、旅装束の人々が



田畑に礎石が点在する幕末頃の都府楼跡  
（江戸末期『名勝画譜』国立公文書館蔵）



『筑前名所図会』（文政4（1821））に描かれた  
観世音寺・戒壇院（福岡市博物館蔵）



絵葉書にみる太宰府天満宮太鼓橋（戦前）



江戸時代の「さいふまいり」の様子（齋藤秋園『博多太宰府図屏風』天保11年（1840）個人蔵、一部加筆）

座る姿から、参詣者に対する休み処が各所に開かれていたことがわかる。

当時、さいふまいりに訪れた人々の紀行文に、「右には水茶や軒をならべ梅が枝てふ餅をうる。」（『狂歌西都紀行』文化4年（1807））、「並に摂待茶屋美麗に懸物生花、色々物ずきの作り也。前後左右宮中茶屋に而ふさぐ」「其外社中の小茶屋数多し。」（『筑紫旅行日記』抄 享和元年（1801））、「側なる茶店に立ちよみて昼のかれひ（乾飯）たうべなどして夫より観世音寺に詣づ」（『安楽寺詣日記』安政4年（1857））、「参道でソバ（忒拾四文盛のソバ）・焼餅（焼餅を食して）」（『富永徳助嘉永三年日記』）と記され、茶屋をはじめ、焼き餅（梅ヶ枝餅）、ソバ、梅が売られていた。また、日田街道とさいふまいりの道が分かれる関屋では「関屋のつなぎだご」という団子が売られていた。山家から幸府のまちへ入る石坂峠には茶屋があり、岩間から出る清水とともに夏は冷たいトコロテンが名物であった。さらに土産物として「こぼれ梅」「焼き餅」「木の盆」があり、木の盆には客の前で参拝記念の月日や名前などを彫って売っていた。その頃の様子を「いろいろ茶てんなんど、いとにぎはひたり」（『道の安良・五月雨紀行』抄 文政8年（1825））と伝えている。

なお、太宰府のお茶について、『竈門山旧記』（江戸中期）には藩主黒田長政より茶の実10石を拝領し、内山の九重原付近を茶園にしたとあり、『福岡縣地理全誌』（明治13年（1880））には「北谷村」の項目に土産物として「茶」が記載されている。これらのお茶は、さいふまいりに来た人々の喉を潤している。

このようなさいふまいりが現在に至るまで続いているのは、道真の文才や不遇な晩



石坂峠の水場

年の物語に負うところが大きく、「学問の神」「文道の神」として時代を超えて多くの人々から信仰を集めている。すでに平安時代には「文道の祖・詩境の主」(慶滋保胤、寛和2年(986))や「文道の大祖、風月の本主」(大江匡衡、寛弘9年(1012))と称賛され、時代を経るごとに貴族から武士へ、武士から庶民へと広がっていった。文学も詩文から和歌、連歌、俳諧まで分野は広まり、これらの会では「南無天満大自在天神」の名号や天神の画像が上座に掲げられてきた。さらに江戸時代以降、寺子屋の守り神とされたことにより一気に広がり、教科書には「菅丞相往来」「菅家御遺訓」「天神往来」など道真に関わるものが多く使われることとなった。また、芸能でも題材として取り上げられ、謡曲「老松」「雷電」や浄瑠璃「天神記」(近松門左衛門作、正徳4年(1714))、特に「菅原伝授手習鑑」(竹田出雲ほか作 延享3年(1746))は人気を博し、菅原道真が「学問の神」であることが浸透する。

太宰府天満宮ではこのような背景をもって、昭和5年(1930)に「文祖の神符」の頒布を開始している(昭和5年(1930)4月11日付の福岡日日新聞)。これが学業御守りのはじめとされ、現在は学業上達、受験合格の祈願の神符や学業御守、御札が授与されている。その他、合格鉛筆など多彩である。

現在も樟の巨樹からなる天神の森に囲まれた太宰府天満宮には一年中参詣者が絶えることなく訪れている。特に、正月は参道に人があふれ、心字池にかかる太鼓橋で立往生し、境内に入っても本殿に近づくのも一苦労する。本殿前には大きな賽銭箱が設けられ、遠くから投げお祈りをする人もいる。人々は一年の運をおみくじで占い一喜一憂する。3月までは学業成就、合格祈願の人々で賑わう。

主な参詣道は、かつての日田街道から並行する県道112号や国道3号へと移り変わった。しかし、現在でも太宰府天満宮を訪れる人は、江戸時代の絵図に描かれたものと同じ四王寺山の風景を見ながら太宰府天満宮へと向かう。

また、山麓には名所を繋いだ歴史の散歩道



初詣で賑わう太宰府天満宮本殿前



祈願の絵馬(太宰府天満宮)



参詣道から望む観世音寺(左側)と四王寺山

や四王寺山の森を活かした市民の森が設定され、多くの人々の散策地にもなっている。また、太宰府天満宮は初夏から秋にかけては修学旅行で参詣する学生が多い。また、海外からの人々の団体はガイドを頼りに参詣に向かう。参詣の前後には都府楼跡や水城跡などの史跡や観世音寺、戒壇院、光明寺などの古刹はもちろん、近年は元号「令和」ゆかりの地として、歴史に思いを馳せながら散策している。



太宰府天満宮境内で記念撮影する修学旅行生

### イ、門前のまちの様子

太宰府天満宮門前は平安時代に菅原道真の霊廟が開かれたことにより大宰府条坊の北東郭外にまち区割が形成されたことに始まる。現在の天満宮門前はおおよそ宰府宿の範囲、門前六町と言われるエリアである(52頁参照)。門前六町は三条、連歌屋、馬場の上三町と大町、新町、五条の下三町に分かれており、江戸時代の門前の棲み分けを反映している。かつて上三町は天満宮に奉仕する社家町で、別当家をはじめ宮師(宮司)、三綱、文人、衆徒のほか特定の役職を持った社家約60家の屋敷が並び、さいふまの宿坊としても利用されていた。一方、下三町には特に大町を中心に大きな宿屋や商家があり、新町から五条には商人や職人あるいは農民が住しており商家、町屋、地主屋敷、農家などがあつた。太宰府天満宮参道は上三町に属する馬場参道と下三町の大町参道にまたがっている。かつては境内と町方を分ける斎垣や水路(幸ノ元溝尻水路)があり、視覚的にも結界を意識させるものであつた。現在も参道の鳥居、参道と交差する小鳥居小路から溝尻にかけての道路や水路にその名残を留めている。また、参道を天満宮へ向かうと両側のまち並みと鳥居の背後に天神の森が緑の背景を形作っている。



かつての宿屋の建物が残る参道の大町地区



小鳥居小路と水路(右側)

江戸時代に宰府宿は多くの参詣者で賑わう。晩年を太宰府で過ごした筑前を代表する

絵師・齋藤秋圃さいとうしゅうほが天保11年(1840)に描いた「博多太宰府ひわだぶさ図屏風」には檜皮葺の延寿王院や土塀で囲まれた社家屋敷、大町には宿屋と目される瓦葺2階建の家並があり、新町・五条には草葺の店が連続し、その中を多くの人々が往来している様子が描かれている。また、紀行文にも「…宿坊宿屋の賑ひ五十鈴川にもおとらじとおもふ」(『狂歌西都紀行』



江戸時代の参道のまち並みと賑わい  
(齋藤秋圃『博多太宰府図屏風』天保11年(1840) 個人蔵、一部加筆)

がんしょうしゃほうさい  
舎笑舎抱臍、文化4年(1807))と伊勢神宮と対比する形で賑やかなさまを伝えている。

参道以外の門前も、小鳥居小路から溝尻は一般商店で賑わい、俗謡に「溝尻口の狭いから お祭りごとに おっせしがっせししょう(おまつりのように押し合っている)」と唄われるほどであった。新町・五条についても商家や職人の家が軒を連ねてい



銅の鳥居がある頃の大町のまち並み  
(大正時代、絵葉書)

た。吉田重房は『筑紫紀行』文化3年(1806)に「十丁ばかり行けば、太宰府に至る。(五条から)町屋千軒ばかり、六七丁もたちつづけり。町中(大町)に銅の鳥居たてり。又一丁ばかりゆけば。一の鳥居とて大きな石の鳥居あり。鳥居の前に下馬札たてり。銅の鳥居より此鳥居まで。一丁あまりの間は茶屋宿屋のみなり。大野屋といふ宿屋を休み所と定め置て。供の男にもたせたる荷物をも此宿にあづけさせて。案内のものを求めて参詣す。かくて一の鳥居に入れば。桜の馬場といひて。左右に桜の木多数生たり。」と当時の門前の様子を詳しく描写している。

このような参道では、17棟が今も江戸時代から昭和初めまでの歴史的建造物で営業を続けている。特に大町参道には、江戸時代の旅館であった泉屋、大野屋、松屋、大和屋が生業を変えながらも営業している。

その他、三条から五条までの通り沿いも宿屋(高田家)や絵師(吉嗣家、萱島家)、地主(西山家、齋藤家)、鍛冶屋(高田家)、商家(木村家)の建物が散在し門前の面影を伝えている。

## ウ、門前におけるおもてなし

太宰府天満宮の門前にとって、明治維新は大きな衝撃をもたらした。神仏分離、境内

地を除く寺社領の没収、社家の奉仕が禁止されるなどにより、社家の困窮をもたらし、茶店・土産物屋を開店したもの、教師や官吏となり太宰府を離れるものなどさまざまであった。特に大きな敷地を有する社家屋敷は敷地の細分化が進み、住宅のほか多種の商人の定住が進み、商家や旅館、芝居小屋（梅楽座）、検番などへ変化していった。このため、社家町だった馬場参道が明治時代以降の建造物で占められるのに対し、大町参道には江戸時代と変わらず旅館建築が多く残る。

門前は古くから人が訪れていることが特徴のひとつであるが、そのために社会状況にあわせて、商売も変化してきている。明治以降は社家地であった馬場参道に甘木屋やみどりや・中村屋・三橋屋などの宿屋、松嶋屋・仁和加屋などの茶店、土産物屋、小田家（生糸）・古川家（百貨店）・杉村家（雑貨屋）・中神家（和傘）・松尾家（和菓子）など一般商店が入り、大町同様参詣者をもてなした。その後、参道の伝統的産業であった旅館は交通網の発達で戦後減少し、平成2年（1990）に最後の1軒である大和屋が廃業した。茶店は土産物屋とセットになったり、喫茶店や飲食店となり存続している。土産物屋の販売内容は、昔ながらの木鷲、博多人形などの民芸品、受験合格縁起ものの小物のほか、梅ヶ枝餅をはじめ梅干しや梅酒などの食品、菓子類、持ち帰りの飲食物が中心である。このように移り行く参道には品定めをしながら天満宮に向っていく参詣者の賑わいと呼び込みの声が各所から聞こえてくる。また、明治時代になり天満宮を離れた社家により写真館も始められ、現在でも境内などで楼門や梅をバックに集



平成2年（1990）まで旅館だった大和屋



境内の授与所に並ぶ様々なお守り



木鷲



参道沿いの店舗の賑わい



合写真を撮影するなど営業している。

古くから変わらない門前の名物に梅ヶ枝餅がある。参道と神苑の 31 軒で製造販売している。もち米とうるち米を 7 対 3 から 9 対 1 くらいの割合で混ぜた米粉をよくこねて小豆餡を包んで、型に入れて焼いたもので、小豆餡は各店によりこだわりがあり、店の個性は餡の量や甘さに現れている。参道にほんのりとただよう香ばしい香りは、どこことなく郷愁を誘う。菅原道真の世話をしてきたもろ尼御前が餅に梅の枝を添えて捧げた、という伝承が由来とされる。江戸時代には狂歌師大田蜀山人の『小春紀行』(文化 2 年 (1805)) にも「宰府の検校坊より海陸安全御守と梅かえといふ餅一箱もて来れり」とその名が見える。梅ヶ枝餅は参詣の土産や、社家が地方へお札などを配りに回る際の土産になるなどして広がったと伝えられる。『絵本菅原実記附不知火草紙』(江戸時代) には梅ヶ枝餅を商う図があり、遠くに参詣する人々が見え、近くに茶店風の建物の前で売り子が七輪で餅を焼きながら売っている。さらに手前にはさいふまいりの人々が楽しげに梅ヶ枝餅を食べながらそぞろ歩いている様子が見える。明治 45 年 (1912) に行われた東京実業之日本社主催の「各地方の名物競」では梅ヶ枝餅は 15 等であり (明治 45 年 (1912) 2 月 24 日福岡日日新聞)、全国的に知られる太宰府の名物となっていた。

第二次大戦後は梅ヶ枝餅の品質向上と規格化の努力が本格化し、昭和 28 年 (1953) に太宰府梅ヶ枝餅協同組合が設立され、物資不足のなか材料を共同で仕入れるなどしていた。



梅ヶ枝餅



梅ヶ枝餅を商う図

(『絵本菅原実記附不知火草紙』太宰府天満宮蔵)



店先での梅ヶ枝餅丸め



梅ヶ枝餅焼き

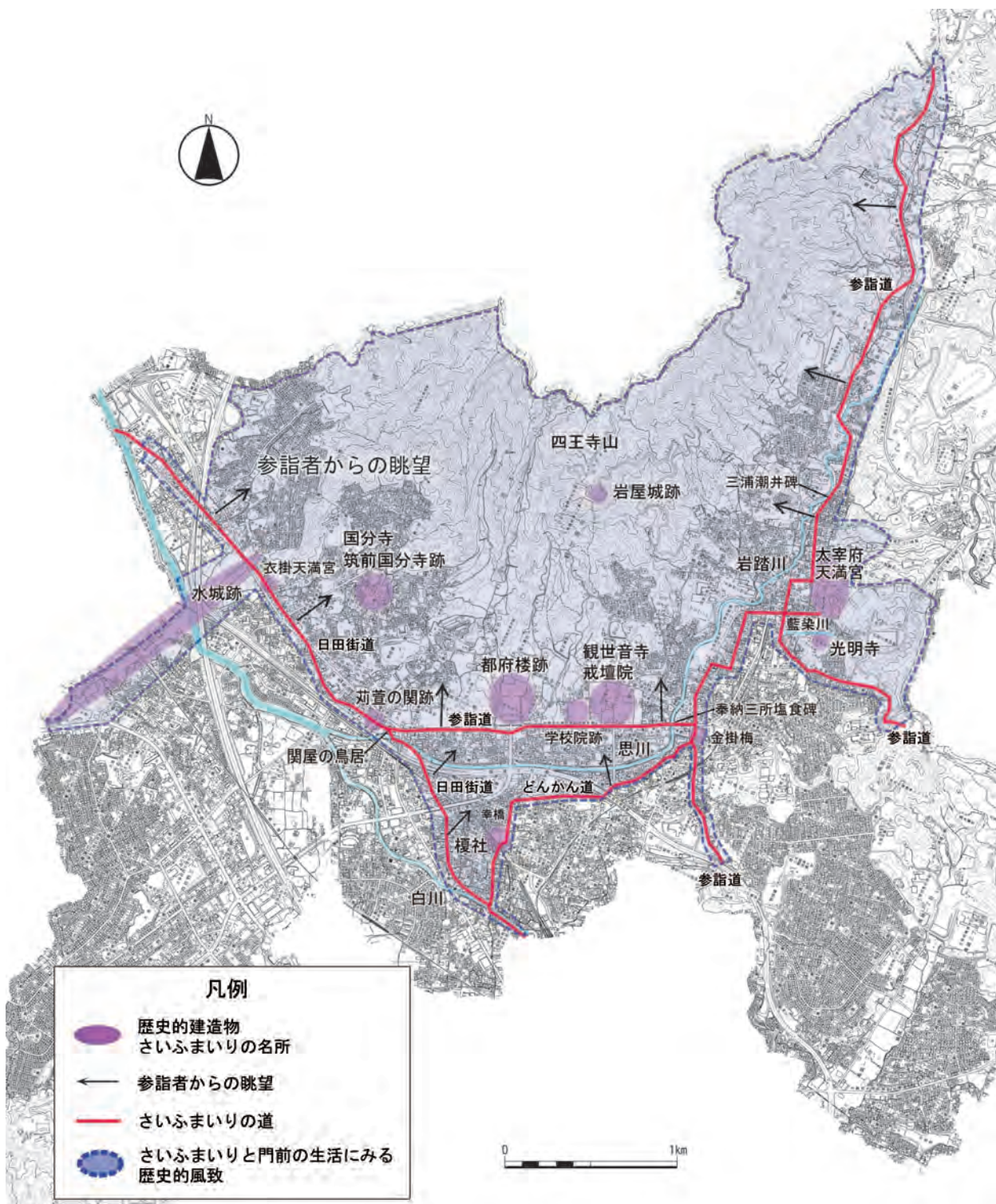
昭和 33 年 (1958) 3 月 6 日付け西日本新聞によると、昭和 33 年 (1958) の梅ヶ枝餅の基準は一個十二もんめ 匁以上、餡一升に白砂糖三斤以上使用、化学調味料は使用不可であった。この頃から、炭火の七輪からガスの焼き台となり、量を多く焼くことができるようになり、昭和 54 年 (1979) 2 月 24 日付け西日本新聞によると 1 個 50 円で、年間販売は 1,000 万個以上であったという。令和 4 年 (2022) 現在で 1 個 130 円となっているが、昔と変わらず太宰府の名物で、正月の繁忙期には門前周辺の北谷、内山、松川や高雄地域の農家の女性が出稼ぎに来ており、梅ヶ枝餅を焼くときの「カン、カン」という焼き型の金属音や参詣者を呼び込む声があちこちで聞こえ、その中を参詣の人々も江戸時代の草紙同様、行き帰りに賑わう参道の店々を楽しみながら、気の向いたところで焼きたての梅ヶ枝餅を買って食べ歩いている。また、神苑の茶店で境内の風景を眺めながらゆっくり味わう人々もいる。

#### (4) まとめ

さいふまいは太宰府天満宮参詣を含め、ひろく太宰府の歴史と文化を楽しむ遊山であり、さいふまいりの人々で賑わってきた天満宮門前では、江戸時代には宿坊・宿屋が整備され茶店などとともに参詣者をもてなしてきた。その伝統は時代と共に変遷を繰り返しながらも今なお続き、太宰府天満宮をはじめ太宰府の名所や周辺の風景は、賑わいともてなしが交錯する観光都市太宰府らしい本市固有の歴史的風致である。



初詣で賑わう太宰府天満宮境内



さいふまいりと門前の生活にみる歴史的風致の範囲

### 3 太宰府天満宮門前の伝統行事における歴史的風致

#### (1) はじめに

太宰府天満宮の南西一帯には、門前町が広がり、太宰府天満宮に奉仕する人々が居住している。この地域は門前六町(52頁参照)と呼ばれ、太宰府天満宮と密接に関わる習俗が多く残されている。その代表的な行事として、正月7日には火除けの祭りである鬼すべが行われ、各地区の祭りとして五条地区では太宰府天満宮への祈願成就のお礼参りとして秋に八朔の千燈明はっさくせんとうみょうなどが行われる。江戸時代に宰府宿という宿場だった門前には、商売繁盛・宿場の守り神として、各所に恵比寿様が祀られている。

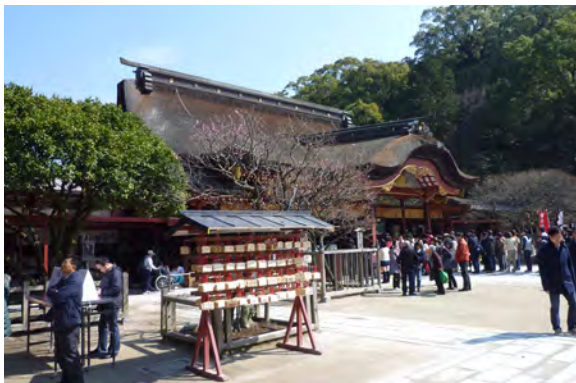
#### (2) 建造物等

##### 〈太宰府天満宮〉

菅原道真を祭神とし、道真の墓所に門弟の味酒安行うまさけのやすゆきによって霊廟が建築されたのが始まりとされる。

##### ・太宰府天満宮本殿

宝永6年(1709)の『筑前国続風土記』によると、戦国時代末に焼失したため、天正19年(1591)に小早川隆景により再建されたと伝わる。本殿は五間社流造の檜皮葺ひわだぶきで、正面に大唐破風の向拝ごはいが、左右両側にも同じような唐破風の車寄を付け、かえるまた裏股や豪華な彫刻などに桃山文化の特徴を残している。重要文化財。



太宰府天満宮本殿



太宰府天満宮楼門



太宰府天満宮太鼓橋



太宰府天満宮参道の石造鳥居

## ・楼門

慶長年間建築の楼門が明治37年(1904)に焼失したため、大正3年(1914)に再建された入母屋造檜皮葺の三間三戸門である(社記・棟札より)。本殿側から見ると楼門だが、逆から見ると二重門に見えるという珍しい造りとなっている。

## ・太鼓橋

楼門南側の心字池に架かる太鼓橋は、延享2年(1745)の『黒田新続家譜』によると延宝2年(1674)に木造から石造に架け替えられたと伝わる。

## ・志賀社本殿

太鼓橋の途中にある志賀社本殿は、明治4年(1871)の『太宰府神社明細図書』によると長禄2年(1458)の再建と伝えられる境内現存最古の建物である。建物は正面1間、側面1間の入母屋造の檜皮葺で、正面には千鳥破風と向唐破風の向拝を付ける。向拝には天明5年(1785)の棟札があり、その頃に手を加えられていることが、水引虹梁の絵様などからも推測できる。重要文化財。

## <太宰府天満宮参道の石造鳥居>

太宰府天満宮参道には、西鉄太宰府駅前から楼門まで5基の鳥居が建ち、全て花崗岩製の明神鳥居である。建立年は各鳥居の刻銘より西側から順に、元禄9年(1696)、明治45年(1912)、明治28年(1895)である。太鼓橋前にある鳥居は銘がないものの、鎌倉末期～室町時代の建立と推測されており、昭和36年(1961)に県の有形文化財に指定されている。そして、太鼓橋を渡った楼門前に、明治35年(1902)の刻銘のある鳥居が建つ。



大正時代頃の参道の鳥居  
(東から、絵葉書)

## <太宰府天満宮門前のまち並み>

太宰府天満宮門前町は、江戸時代には筑前二十一宿のひとつ宰府宿となった。天保11年(1840)の『博多太宰府図屏風』(69頁)にみるように草葺屋根の建物が建ち並ぶまち並みだったが、明治から大正時代にかけて、参道周辺は、瓦葺の建物が建ち並ぶようになった。現在でも、新町、参道、小鳥居小路、溝尻などに白壁造の瓦葺建物が残されている(48頁参照)。



恵比寿像と並ぶ小山家(手前)・杉村家住宅

## <恵比寿様>

恵比寿像は、市内全体で30体が存在し、門前六町にはその2/3の20体があり、材は石造19体、木造1体である。像容は、浮彫1、線刻15、文字3、不明1である。恵比寿像の原画は作者不明が多いが、吉嗣梅仙よしつぐばいせん(1817～1896)の銘を持つ恵比寿像(表⑩)があるように、門前在住で身近な存在であった町絵師吉嗣家よしつぐや萱嶋家かやしまが関わったものと推測され、商業地域である門前六町と町絵師の存在が、これほどの狭い範囲に多くの恵比寿像が存在する結果をもたらしたものと推測される。なお、制作年代については不明なものも多いが、文化7年(1810)のものが最も古く、大正10年(1921)が最も新しい制作である。



文化7年銘の恵比寿像(⑬)



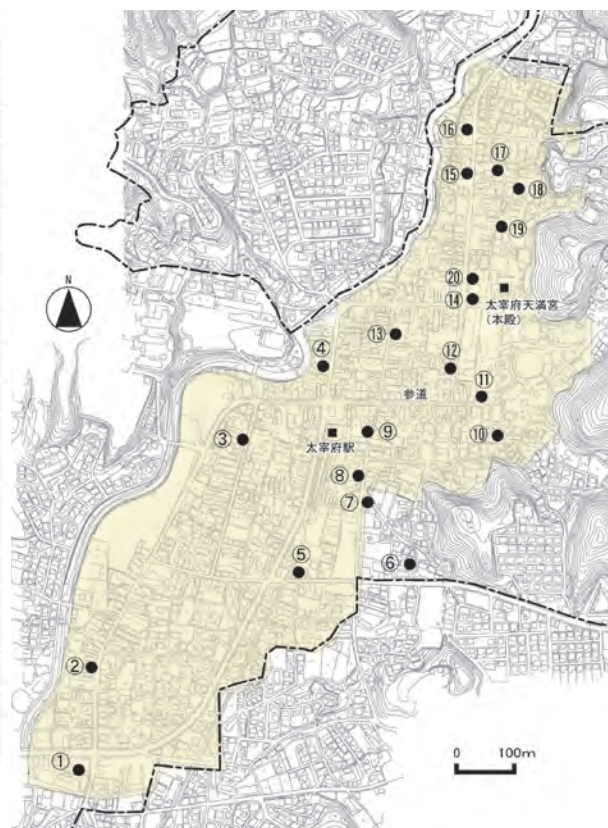
慶応3年銘の恵比寿像(⑯)



大正10年銘の恵比寿像(②)

門前六町所在の恵比寿像一覧

番号	所在地	材質	像容	造立年代(刻銘)
①	五条2丁目	石造	梵字	不明
②	五条1丁目	石造	蛭児尊	不明
③	宰府1丁目(新町)	石造	えびす像線刻	不明
④	宰府1丁目	石造	えびす像線刻	大正10年(1921)
⑤	宰府2丁目	石祠のみ。宅内に木造恵比寿像あり。		
⑥	宰府2丁目	石造	蛭子神社銘	不明
⑦	宰府2丁目	石造	えびす像線刻	不明
⑧	宰府2丁目(溝尻)	石造	えびす像線刻	文化14年(1817)
⑨	宰府2丁目	石造	えびす像線刻	不明
⑩	宰府4丁目(浮殿横)	石造	えびす像線刻	不明
⑪	宰府4丁目	石造	えびす像線刻	明治23年(1890)
⑫	宰府3丁目	石造	えびす像線刻	明治29年(1896)
⑬	宰府3丁目(小島居小路)	石造	えびす像浮彫	文化7年(1810)
⑭	宰府4丁目	石造	えびす像線刻	明治5年(1872)
⑮	宰府3丁目	石造	えびす像線刻	天保2年(1831)
⑯	宰府5丁目	石造	えびす像線刻	慶応3年(1867)
⑰	宰府4丁目(安行社)	石造	えびす像線刻	不明
⑱	宰府4丁目	石造	えびす像線刻	不明
⑲	宰府4丁目(北神苑)	石造	えびす像線刻	明治25年(1892)
⑳	宰府4丁目	石造	えびす像線刻	不明



太宰府天満宮門前の恵比寿像分布図

### (3) 活動

#### ①鬼すべ

##### ア、鬼すべの歴史

鬼すべは、文化11年(1814)編纂の『筑前国続風土記拾遺』によると、寛和2年(986)に大宰大貳菅原輔正すがわらのすけまさによって始められた。災難消除、火除けの火祭りとして、毎年1月7日夜に鬼すべ堂で行われる。県指定無形民俗文化財。

鬼すべは、江戸時代までは天下泰平・玉体安穩などを祈念した修正会しゅうせいえの終わりに行われた追儼ついな・鬼おに儼やらい(共に鬼を払う行事)である。



鬼すべ

この修正会しゅうせいえは天台の大法要の際とりおこなわれる唄うた・散華さんげ・梵音ぼんおん・錫杖しゃくじょうの四箇法要しかたほうようを基礎として本尊を賛嘆する三十二相などが加えられ、満願まんがんの七日夜の結願法要けつがんほうように鬼儼おにやらいをつけた大法要であった。江戸時代には時代が下がるほど、満願まんがんの鬼儼おにやらいは盛大になっていった様子が見て取れる。比較的静かに行われていた修正会の最後の部分は、時代が下がるとともに牛玉宝印ごおうほういんを挟んだ牛王杖お牛で鬼を打ち、燻ふすべ捕えられる。また堂の壁を叩き破るなどという一般に興味を引くやり方に変化し年々盛大になっていった。19世紀初めごろには鬼おにを燻ふすべるやり方が松葉ばかりでなく、藁も燃やし、そこに重点が置かれるようになり、「鬼すべ」と呼ばれるようになった。明治維新の神仏分離の影響により、仏法によるものとして止めるよう達しがあったが、町の人々が連名で追儼は仏教行事でないと述べると共に、参詣者の減少により町がさびれ、生活が困窮することなどを申し出、鬼すべの存続に成功している。それほど太宰府の人々にとって大切な祭りであった。

##### イ、行事内容

鬼すべは、1月7日に鬼すべ堂で行われる行事である。神職は元旦から7日間にわたって、齋戒沐浴さいがいもくよく(飲食や行動を慎み、心身を洗い清めること)して祓神事を執行し、その満願まんがんの日に六町の氏子たちの奉仕による鬼すべが行われる。総勢約300人が燻手すべてと鬼警固との2つに分かれ、ともに境内に繰り込む。神職から渡された忌火いみびを堂内の生松葉60把、藁200把で築かれたカマに移し、燻手すべてが唐団扇とううちわであおぐと、鬼警固が堂内に入ってテン棒で壁を打ち破る。荒縄で括られた鬼は、鬼係に連れられ堂内に入ると、燻手すべてが唐団扇で煙を送り込み、鬼は堂内を7回半逃げ回る。鬼が1回廻るごとに神職が豆を投げつけ、卯杖うづえ(邪気を払う杖)で打つ。7回半廻り終わると鬼は正面から外に出て、堂の前の広場をさらに3回半廻って行事を終わる。焼け残りのお堂の板切れは火除けまじなの呪いとして家の入口に打ち付ける風習があり、持ち帰る人が多い。



太鼓橋を渡り鬼すべ堂へ向かう



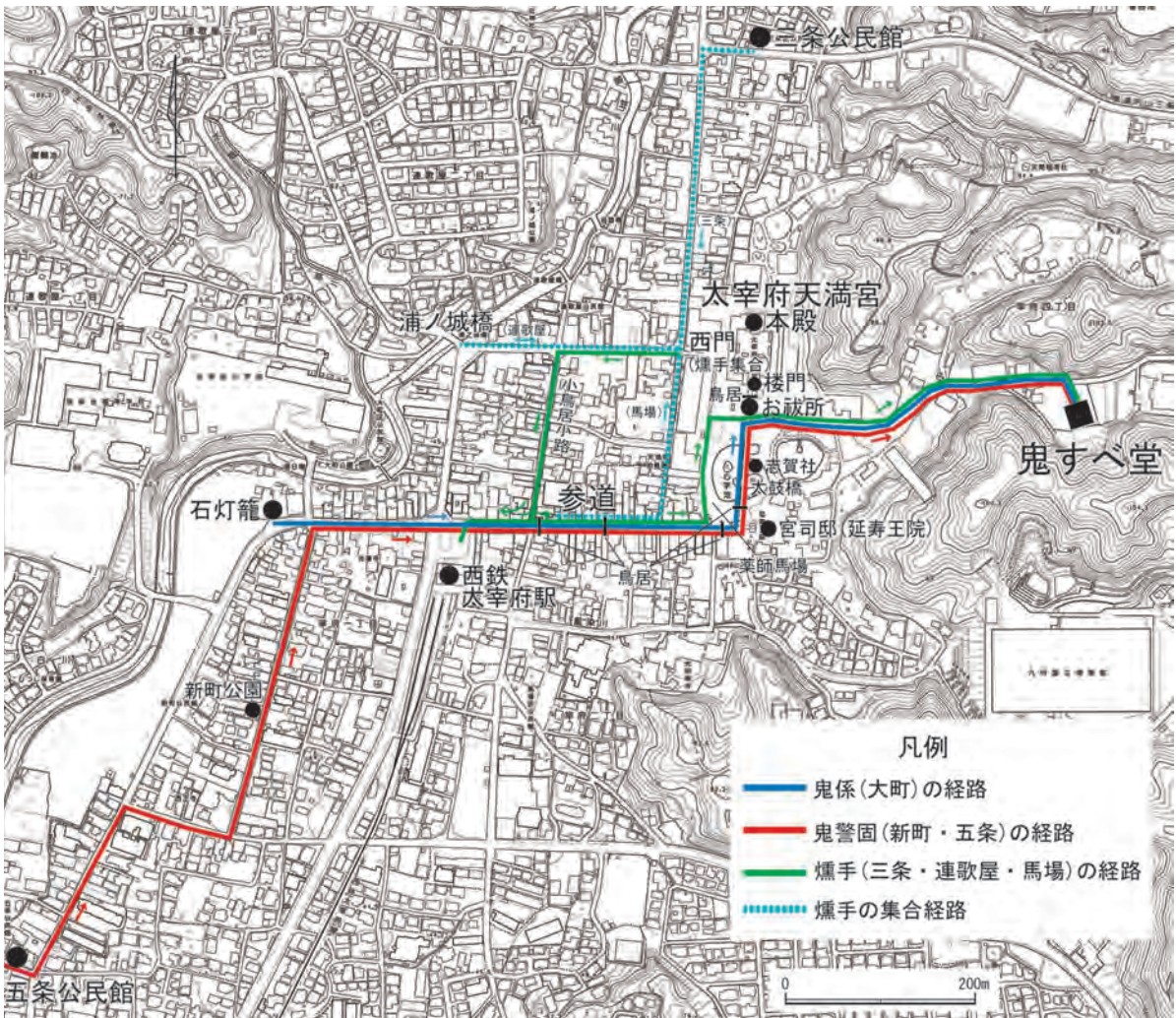
お祓い



カマの前で唐団扇を構える燻手



お堂の板切れを持ち帰る人々



鬼すべの経路



## ウ、役割

鬼すべは、昔からの天満宮の氏子である三条・連歌屋・馬場・大町・新町・五条の六町がそれぞれの役割を分担し奉仕する。

### <鬼係>

鬼係は大町が勤める。『筑前国統風土記』<sup>ちくぜんのくにぞくふどき</sup>によると天満宮に参拝してきた者を鬼としていたというのが、現在でも秘密である。鬼にされた者は48ヶ所を縛られ鬼すべ堂近く<sup>あくしゃ</sup>の握舎で待機する。鬼面は江戸時代の作で、鬼面を使う人を「鬼面つかい」といい、大町の鬼木家が勤めた。鬼面は参道西端の石灯籠前の祭壇に飾り、午後5時より鬼面飾祭が行われる。これに参列するのは大町区の氏子総代、宮世話人、祭祀係、中老取合、若手取合、鬼つかい、火渡し役の鬼木家当主である。鬼係は参道西端の石灯籠前に集合し、松明1本を担ぎ「オンジャ、オンジャ（鬼じゃ、鬼じゃ）」と言いながら斎場に向かう。祭りが始まると鬼はムシロなどで体を隠し、大町の若者に囲まれて、鬼面使いの後ろについて堂の内外を廻る。

### <鬼警固<sup>おにけいこ</sup>>

新町と五条が勤める。鬼警固は、堂を叩き破るために使う木槌やテン棒を持ち、斎場<sup>ほうぞうたいまつ</sup>へ参入する。鬼警固は宝蔵松明・竹松明・鬼松明の3本の松明を持つ。松明の大きさは直径40cm、長さ7mほどあり、1本に40人ほどが付く。最も大きな宝蔵松明は、天満宮本殿の斎火<sup>いみび</sup>で点火して、五条公民館から「オンジャ、オンジャ（鬼じゃ、鬼じゃ）」と言いながら、参道のまち並みを松明で照らしながら宮司邸前に着く。そして、宮司が出仕し、宝蔵松明を先頭に鬼松明・竹松明が続き、太鼓橋を渡り、楼門前で本殿の斎火をもらい、鬼松明・竹松明に火をつける。



石灯籠前の祭壇で行う鬼面飾祭



松明を担ぎ参道を進む鬼係



松明を担ぎ参道を進む鬼警固



3本の松明

この頃を見計らって、鬼警固が鳥居前に行きお祓いを受け鬼すべ堂に行く。

### ＜燻手＞

三条・連歌屋・馬場の上三町が勤める。鬼を燻べる役で、唐団扇・刈又（火が起りやすくするためカマの下に入れる丸太）を持つ。唐団扇に、三条は「三条組」、連歌屋は「連」、馬場は「桜若」と書き込み、裏に梅紋を描く。各町10本ずつ、計30本用意する。1月7日夜7時半、各区を出発した燻手は天満宮西門（連歌屋口）に集まり、午後8時頃「オンジャ、オンジャ（鬼じゃ、鬼じゃ）」と言いながら、連歌屋を下り、小鳥居小路から西鉄太宰府駅、参道へと進み、神社では太鼓橋を渡らず、薬師馬場を通り、唐団扇・刈又を池の畔に立てかけ、鳥居前でお祓いを受け、鬼すべ祭場へ向かう。祭場に到着すると生松葉や藁を積み上げ形を整えて鬼すべ堂の北側にカマをつくる。



テン棒を持つ鬼警固



唐団扇で火をあおぐ燻手

### ② 鷺替え神事

1月7日の夜、鬼すべに先立って太宰府天満宮楼門前の広場で行われる。

鷺替えの起源は明らかではないが、江戸後期の『百人一首一夕話』の記事から、万治年間（1658～1661年）には既に盛んに行われていたことがわかる。嘉永3年（1850）の『富永徳助日記』には、人々が楽しんで参加していた様子がいきいきと描写されている。



鷺替え神事

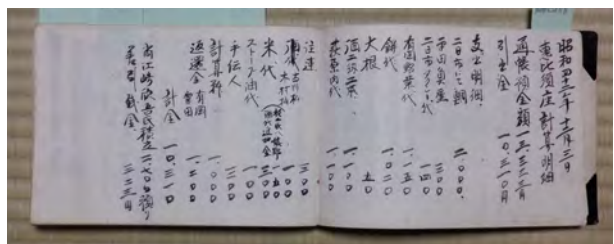
神事は注連縄を張った中で行われ、参拝者が暗闇の中で「替えましよ、替えましよ」と呼び合いながらそれぞれ手にした木鷺を替え合うもので、この中に神職が出した金鷺があり、当たった者はその年の幸運を得ると言われている。鷺は天神様の守りの鳥とされるもので、人が知らず知らずつく嘘を、木鷺を替え合うことによって、天神様に変えていただくという意味があると言われている。

### ③恵比寿祭

太宰府天満宮の門前町として栄えた門前六町（三条、連歌屋、馬場、大町、新町、五条）には、商売繁盛・宿場の守り神として、江戸後期から大正時代にかけて、恵比寿像が制作され路傍のあちこちに祀られた。それぞれ近所の4～10軒ほどの家が組を作ってお世話をしている。12月2日の宵恵比寿に当番が注連縄を掛け、幕を張り、供物に鏡餅・生鯛・御饌米・野菜・水・お神酒を供え、灯明を掲げる。各時代の供え物については、大正時代から残る『組合記録』や『小鳥居小路恵比須記録帳』などで知ることができる。12月3日には朝暗いうちから組で連れ立って各所の恵比寿様にお参りして廻ることを習慣とし、三条では「ナナトコマイリ（七所詣り）」、連歌屋では「トウゴマイリ（十ヶ所詣り）」と呼んでいる。それが済むと各当番の家に戻って、供物を下げて作った料理で直会なおらいをした。直会の座には恵比寿様の掛軸が掛けられる。その恵比寿像は門前在住の町絵師吉嗣家よしつぐや萱嶋家かやしまが描いたものが多い。



恵比寿祭（小鳥居小路）



小鳥居小路恵比須祭記録帳（個人蔵）

### ④八朔の千燈明

八朔の千燈明は、毎年9月1日の夕刻に行われている五条区の神事である。江戸後期に起きた疫病の際、太宰府天満宮に五條町（現五条区）の人々が疫病除けの祈願をしたところ、病人が減少したので、そのお礼として始められた行事である。五条区に残る昭和4年（1929）の『金銭出納簿』には灯明作りのロウソクや針金を購入した記録が残されている。戦時中から物資不足で一時休止していたが、昭和38年（1963）には五条区の行事として再開した。



八朔の千燈明を行う場所



八朔の千燈明



灯明



金銭出納簿（昭和4年）  
（個人蔵）

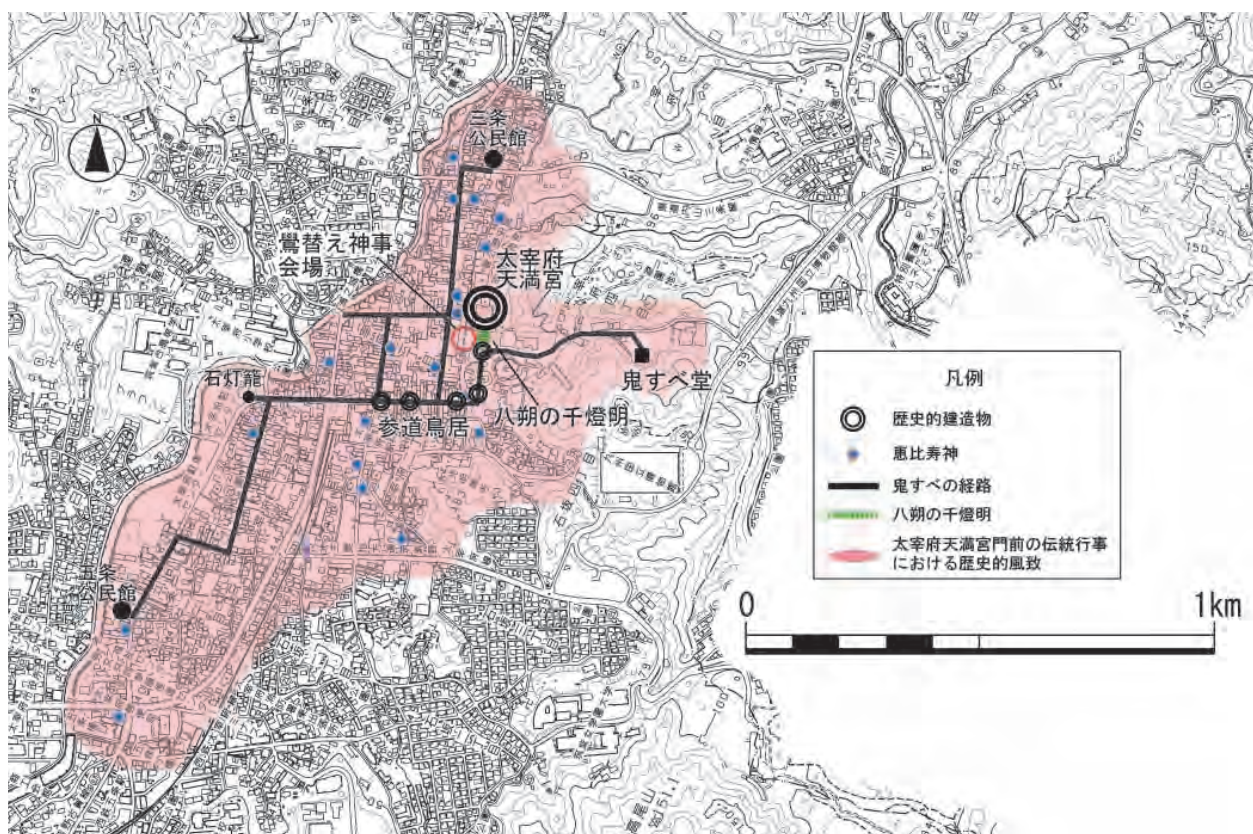
行事は五条公民館に集合した後、どんかん道を歩いて太宰府天満宮に向かい、太宰府天満宮でお祓いを受けた後、楼門前に並べたロウソクに御神灯で火を灯し献灯する。

なお、この行事は平成23年(2011)に太宰府市民遺産に認定された。

#### (4) まとめ

鬼すべは、闇夜の門前で繰り広げられる迫力ある神事で、昼間の観光客の賑わいと全く異なる雰囲気がある。この神事は門前六町や太宰府の人々にとって、一年の始まりともいえる行事である。

また、門前で行われるその他の祭りも、太宰府天満宮にゆかりのある門前町ならではの行事が多いが、日常の門前の賑わいと対照的に静かなものばかりである。特に街角にひっそりとある恵比寿様は、門前の人々の様々な思いを秘めつつ、静かにまちを見守り続けているように見え、静と動の伝統が重なり合う門前町太宰府らしい歴史的風致である。



太宰府天満宮門前の伝統行事における歴史的風致の範囲

## 4 梅に関する歴史的風致

### (1) はじめに

梅の花は、太宰府市の「市の花」であり、毎年春を告げる行事として内閣府に太宰府天満宮から献梅が行われ、太宰府と梅が密接な関係にあることはよく知られている。

梅は古代に中国大陸から北部九州に伝来したと言われている。『万葉集』には「梅花の歌三十二首」があり、大宰府の長官である大宰帥大伴旅人が、自邸において天平2年(730)に開催した「梅花の宴」で詠まれた歌を収録している。当時中国からもたらされたばかりの珍しい梅を、旅人をはじめ筑前国守山上憶良や造観世音寺別当沙弥満誓、大宰少弐小野老など大宰府に赴任していた人々が宴を催し梅を詠んだのである。

太宰府天満宮には祭神である菅原道真ゆかりの飛梅伝説が伝わる(『宝物集』平安末期)。昌泰4年(901)菅原道真が大宰府へ西下する際、京の紅梅殿の梅に

“東風吹かばにほひをこせよ 梅の花 主なしとて 春を忘るな”

(梅の花よ、春になって東風が吹いたら、香りだけでも私のもとへ届けておくれ、主人がいなからといって、春は忘れてはならないよ)(『拾遺和歌集』寛弘2年～4年(1005～1007))と詠みかけた。道真を慕った梅は、道真が大宰府に着くと、一夜のうちに大宰府の配所へ飛んできたという伝説である。飛梅は太宰府天満宮本殿前にあり、境内の梅の中で一足早く開き咲き誇る。やがて太宰府天満宮は梅の名所となり、飯尾宗祇が文明12年(1480)に記した『筑紫道記』には「池のめぐりには千万株の梅の林をなせり」と記されるなど、心字池の周囲は現在も多く梅があり、社殿の朱と樟の緑に映える梅花を愛でる人で賑わう。また、大宰府政庁跡周辺にも「梅花の宴」ゆかりのある梅が植樹され、太宰府天満宮と共に梅の名所となっている。

さらに近年では、前述の『万葉集』巻五にある「梅花の宴」の歌の序文が、元号「令和」の典拠とされ、「令和の都」として注目されている。

### (2) 建造物等

#### <太宰府天満宮本殿>

太宰府天満宮の祭神は菅原道真で、本殿はその墓所という。本殿は、宝永6年(1709)の『筑前国続風土記』によると、戦国時代末に焼失したため、天正19年(1591)に小早川隆景により再建されたと伝わる。本殿は五間社流造の檜皮葺で、正面に大唐破風の向拝が、左右両側にも同じような唐破風の車寄を付け、臺股や豪華な彫刻などに桃山文化の特徴を残している。重要文化財。



太宰府天満宮本殿と飛梅

また、本殿前には木柵に囲まれた菅原道真ゆかりの飛梅とびうめがあり、境内にある梅の中でひと足早く花が咲くことで知られている。木柵上部の擬宝珠ぎぼし（現在のものはレプリカ）には、天正17年（1589）の刻銘があり、江戸時代の絵図にも木柵に囲まれた飛梅とびうめが描かれており、昔と変わらぬ景観を残している。

### ＜太宰府天満宮ひがしんえんの東神苑きたしんえん・北神苑＞

太宰府天満宮境内には現在200種6000本の白梅・紅梅が植えられている。菅原道真御神忌一千年大祭の明治35年（1902）には、境内の北側と東側には北神苑と東神苑が整備され、3000本の梅が植樹された。また、東神苑の一面には、明治34年（1901）に木造平屋建入母屋造いりもやづくりの文書館ぶんしょかんが建築された。梅林や文書館の様子は、大正14年（1925）・昭和5年（1930）・昭和8年（1933）発行の絵葉書や明治35年（1902）に刊行された「太宰府神社境内之図」などに見ることができる。



東神苑の梅林と文書館

### ＜太宰府天満宮参道の石造鳥居＞

太宰府天満宮参道には、西鉄太宰府駅前から楼門まで5基の鳥居が建ち、全て花崗岩製の明神鳥居である。建立年は各鳥居の刻銘より西側から順に、元禄9年（1696）、明治45年（1912）、明治28年（1895）である。太鼓橋前たいこはしにある鳥居は銘がないものの、鎌倉末期～室町時代の建立と推測されており、昭和36年（1961）に県の有形文化財に指定されている。そして、太鼓橋を渡った楼門前に、一千年大祭にあわせて建立された明治35年（1902）銘のある鳥居が建つ。



参道東側から見た石造鳥居

### ＜太宰府天満宮門前のまち並み＞

太宰府天満宮門前町は、江戸時代には筑前二十一宿のひとつ宰府宿となった。天保11年（1840）の『博多太宰府図屏風』（69頁）にみるように草葺屋根の建物が建ち並んでいたが、明治から大正時代にかけて、参道周辺は、瓦葺の建物が建ち並ぶようになった。現在でも、新町、参道、小鳥居小路、溝尻などに白壁造の瓦葺建物が残されている（48頁参照）。



参道のまち並み

### (3) 活動

#### ① 献梅と観梅

太宰府天満宮では観梅とともに梅を奉納する献梅も盛んである。杉山義信父は文化14年(1817)の『鹿児島日記』に「それより別当の坊をたち出て梅の木二株を寄付しまいらせ」と記し、献梅の風習は見える。明治35年(1902)の菅原道真御神忌一千年大祭には、天満宮神苑8万坪に3000本の梅が献納、植樹された。その後も節目の大祭や歌舞伎役者など著名人による献梅が盛んに行われ、また、一千年大祭をきっかけに厄除け行事である「梅上げ」による奉納が始まったとされる。戦前戦後の古写真からもその賑わいぶりを見ることができ、現在でも3月に初老と還暦の人々により献梅(梅上げ行事)が続けられている。太宰府天満宮境内は、東神苑・北神苑を中心に現在200種6000本以上の梅林となっており、春には香りで満ちあふれ、環境省「かおり風景100選」にも選定されている。

太宰府天満宮を中心にした観梅は、福岡地域の春を告げる風物詩となり、新聞には「観梅」「太宰府」の見出しの記事が頻繁に現れている。明治45年(1912)3月4日付け福岡日日新聞「昨日の太宰府」という記事には、「昨日は日曜の好天気にて梅も見ごろとなりたることとて筑前太宰府神社に梅見参詣に出掛くるもの少なからず。太宰府町は各戸造花献灯にて市を飾りて景気を添えて、拝殿裏の梅花は今を真盛りにて、老いたると若きをとわず芝生の上に赤毛布を敷き割子の飯に舌鼓を打ちつつ興じ居るもの数を知らず。上下列車及び二日市よりの馬鉄は悉く満員にて非常に賑わいたる。」と、賑わいと春の楽しみを伝えている。また、昭和34年(1959)2月8日付け西日本新聞夕刊には、2・3分咲きの肌寒い中、梅林の下に敷物を敷き、一升瓶を並べ食事をしながら観梅する多くの観梅客の姿を伝えている。現在梅林保護のため、以前のように梅の根元で食事をする姿は見られなくなったが、茶店が梅林を囲む北神苑では、店先の縁台に腰かけて梅を眺めながら食事をする姿を見ることができる。また、梅ヶ枝餅を片手に梅の花と並んで記念撮影する姿は、初春の太宰府らしい光景のひとつである。

市域に目を移すと、伝承が残る梅の木が各所に残されている。菅原道真配所であった榎社近くで代々受け継がれている「飛梅」の原木、道真の子隈麿の墓の傍らにある六弁の花弁をつける「六弁の梅」、室町時代に



北神苑の観梅風景



隈麿の墓と六弁の梅

生まれた「<sup>かねか</sup>金掛け梅」伝説をもつ旧古川家にある梅など、梅にまつわる物語とともに梅の木が育てられ、地域の人々によって継承されている。

昭和40年(1965)1月9日付け朝日新聞には、大宰府跡を史跡公園として整備する構想が決まり、政庁跡の北側には梅林を植える計画を伝えている。現在政庁跡周辺の梅林は、太宰府天満宮に次ぐ太宰府の梅の名所となっている。



大宰府政庁跡の梅林

また、市内の住宅地には多くの梅が植えられており、3月初旬頃になると、普通の住宅地を散策するだけで、様々な品種の梅を観梅できる。太宰府と梅の連想は強く、

“万代に年は来経とも梅の花絶ゆることなく咲きわたるべし”（永遠に年は過ぎて行くとも、梅の花は絶えることなく咲き続けることであろう）と、筑前介佐氏子首が「梅花の宴」で歌ったように、千二百年を経た現在も市内いたる所で絶えることなく春になると梅花は咲き誇り、植えられ、献げられ、愛でられている。

## ②梅上げ行事

梅上げとは初老（数え年40歳）を迎える男性と還暦（数え年60歳）を迎える男女が、厄払いとして太宰府天満宮に梅を奉納する行事である。明治35年(1902)の菅原道真御神忌一千年大祭に関わって、梅の植樹活動が行われたことがきっかけで始められたといわれている。

現在は3月に初老と還暦の2回実施される。中央公民館を出発し、梅の木を曳く牛を先頭に、三味線や太鼓をならす梅ばやし隊が続き、その後ろを初老や還暦の人々が沿道の人たちに餅を配り、接待を受けながら、太宰



梅上げ行事のコース

府天満宮まで練り歩く。なお、餅を配ることは厄落としの意味があるといわれている。最初はきれいに並んでいた参加者も、接待で振舞われたお酒で酔いがまわり、参道の鳥居をくぐる頃にはみんな千鳥足となっている。そして、太宰府天満宮にたどり着いた参加者は、最後に境内の一画に梅を植樹する。太宰府市民遺産。





参道を進む梅上げの行列



接待の様子



昭和43年(1968)の梅上げの様子(写真:個人蔵)



梅の植樹の様子

### ③ 曲水の宴

曲水の宴は、禊祓の祭事として古代中国で行われていた。太宰府天満宮では天徳3年(958)、大宰大貳小野好古だざいのだいに おののよしふるによって始められたと伝わり、鎌倉時代以降行われなくなったと考えられている。昭和38年(1963)3月17日、道真の御霊を詩歌で追善するための神事として復興し、翌3月18日付けの各社新聞に復活した曲水の宴の様子が報じられている。現在でも3月第1日曜日に梅が咲く東神苑の曲水の庭にて行われている。



曲水の宴(写真提供:太宰府天満宮)

神事の内容は、十二単をまとった姫をはじめ平安装束に身をつつんだ参宴者が、曲水の庭の上流より流された酒盃が自分の前を過ぎる前に和歌を作り、お酒をいただくという雅な神事である。

### ④ 太宰府の人々と梅との関わり

観梅や行事以外でも、献梅や植樹は行われ、剪定や消毒などの維持管理が常に行われている。

太宰府天満宮境内では、北神苑・東神苑を中心に、境内各所に梅が植えられ、献梅碑も建てられている。博多高砂連はかた たかさごれんの献梅碑には「大正十年壹月吉辰」の刻銘があるなど現代に至るまで各時代の献梅碑から梅上げ行事での献梅のほかにも個人や団体など様々な形で献梅が行われてきたことが窺える。また、昭和2年(1927)に1025年大祭の際に行政は「梅の里構想」を打ち出し、各家庭に梅の苗木を配布した(昭和33年(1958)1月30日付け西日本新聞)。また、戦後には大規模に造成された住宅団地でも引っ越してきた住民の話し合いにより「太宰府だから庭にはかならず梅を植えよう」とした都府楼団地のような例や幼稚園の卒園記念に梅の苗が配布された時期もあり、太宰府市の人々にとって梅は非常に身近なものとなっている。

昭和36年(1961)2月12日付け西日本新聞には、参道一带や榎社などに梅を植樹する予定と伝えている。昭和36年(1961)には1060年大祭に向けて太宰府天満宮が梅園を3ヶ所新設している(昭和36年(1961)12月28日付け西日本新聞)。

このように植樹された天満宮境内の梅林は、太宰府天満宮神苑管理部によって剪定・消毒・施肥などの作業が一年中行われている。6月には飛梅とびうめをはじめ天満宮境内の梅林の梅の実ちぎりが行われ、その後境内の片隅で梅を天日干しする風景は、梅の実ちぎりと共に太宰府の夏の風物詩となっている。

また、市内でも各家庭の庭に咲く梅は、天満宮と同じような季節の行事を楽しむことができ、6月頃になると、竹竿を抱え庭先の梅の実を取る姿を見かける。そして、



北神苑での献梅(戦前)(写真提供:太宰府天満宮)



梅の実の天日干し(太宰府天満宮)



大宰府政庁跡の梅の実ちぎり



梅の種納め所



## 5 観世音寺の「除夜の鐘」にみる歴史的風致

### (1) はじめに

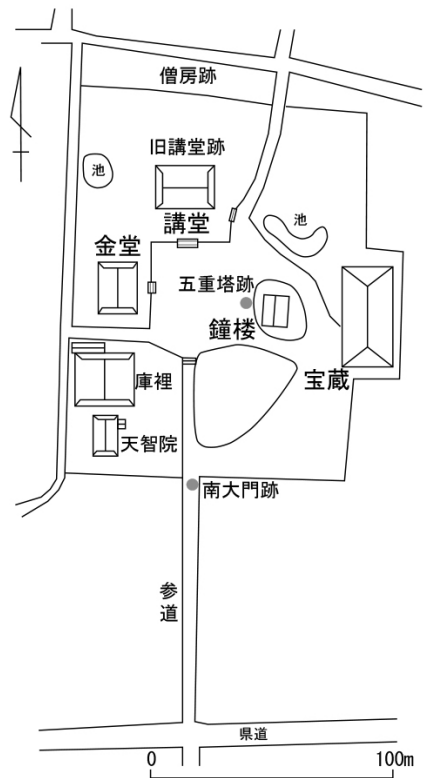
観世音寺は、『続日本紀』(797年)の和銅2年(709)の条によると、天智天皇が斉明天皇の菩提を弔うために発願した寺である。天平18年(746)に落慶法要が行われ完成している。『観世音寺資財帳』(905年)や伽藍絵図(1526年)などから、七堂伽藍を備えた「府の大寺」に相応しい寺院であった。天平宝字5年(761)には、僧侶の資格を与える場である戒壇が設けられ、奈良東大寺、下野薬師寺と共に「天下の三戒壇」といわれた。観世音寺には西海道の僧尼・寺院・仏事を統括する講師が置かれ、西海道諸国の国講師の頂点に立った。また、建立や活動時期が異なるが、49の子院があったとされ、天文14年(1545)には「末院四十九所」の文言がみられる。



観世音寺の梵鐘

平安時代後期以降度重なる災害や天正14年(1586)の岩屋城の戦いなどにより堂舎は失われ、現在見る講堂や金堂は江戸時代に再建されたものである。

観世音寺の梵鐘は、「戊戌年」(698年)、「糟屋評」(現在の福岡県粕屋郡)の銘がある京都妙心寺の梵鐘と兄弟鐘で、同じ鑄型で造られたとみられているが、龍頭の大きさや妙心寺梵鐘が洗練され完成された形であることから、観世音寺梵鐘の方がより古いと推測されている。また、菅原道真が配所で鐘の音を聴き、「都府楼纔看瓦色 観音寺只聴鐘聲(都府楼はわずかに瓦色をみる 観音寺は只鐘の音を聴く)」(『菅家後集』延喜3年(903))と詠んだことで知られる。平安時代と同じように鐘の音を今日も太宰府に響かせており、環境省の「日本の音風景100選」に選定されている。



観世音寺境内概略図

### (2) 建造物等

#### <観世音寺>

観世音寺は天智天皇が母である斉明天皇を供養するために飛鳥時代に発願した寺で、天平18年(746)落慶法要が行われた。かつては「府の大寺」と呼ばれ、隆盛を誇っていたが、戦国時代の混乱で衰退した。現在、五重塔の心礎や講堂の礎石群などから当時の様子を偲ぶことができる。境内は昭和45年(1970)に子院跡と

共に国の史跡に指定された。

・**講堂**

入母屋造本瓦葺、平面は本体3間に裳階四面形式で、南面して建つ。棟札より元禄元年(1688)の建築である。県指定有形文化財。

・**金堂**

境内西側にあり東面して建つ。入母屋造本瓦葺で、正面5間、側面4間で、身舎柱は八角柱で礎盤を置き、庇は角柱を用いている。明治初期の『福岡縣地理全誌』によると、寛永8年(1631)に建築されたものという。県指定有形文化財。



観世音寺金堂・講堂

・**宝蔵**

昭和34年(1959)に観世音寺復興事業の一環として建築されたもので(昭和34年(1959)7月9日付け朝日新聞)、高床の鉄筋コンクリート造、寄棟造の本瓦葺で、棟には鴟尾をあげる。腰壁は瓦の木端積で、舟肘木で支える軒天井を吹付仕上、板軒風の軒を打ち放している。伝統的な様式を踏まえながら、精度の高い型枠工事がなされている。内部には重要文化財の仏像が安置されている。



観世音寺宝蔵

・**鐘楼**

明治時代の絵葉書には、講堂前にある鐘楼が写されているが、昭和20年代には観世音寺五重塔跡の東側の現在地に移され、昭和30年代には鐘楼周囲で子供たちが遊ぶ写真が残されている。その鐘楼は花崗岩の打ち込み接ぎの石垣の基壇上にあり、建物は、2間×1間の切妻造本瓦葺で、柱は丸柱である。



観世音寺鐘楼

(3) 活動

観世音寺の梵鐘は、菅原道真が漢詩「不出門(もんをいはず)」で「都府楼纔看瓦色 観音寺只聴鐘聲」(『菅家後集』延喜3年(903))と詠ったことで知られる。

現在観世音寺では、秋の天満宮神幸祭のとき以外、日常的に梵鐘を撞くことはなく、12

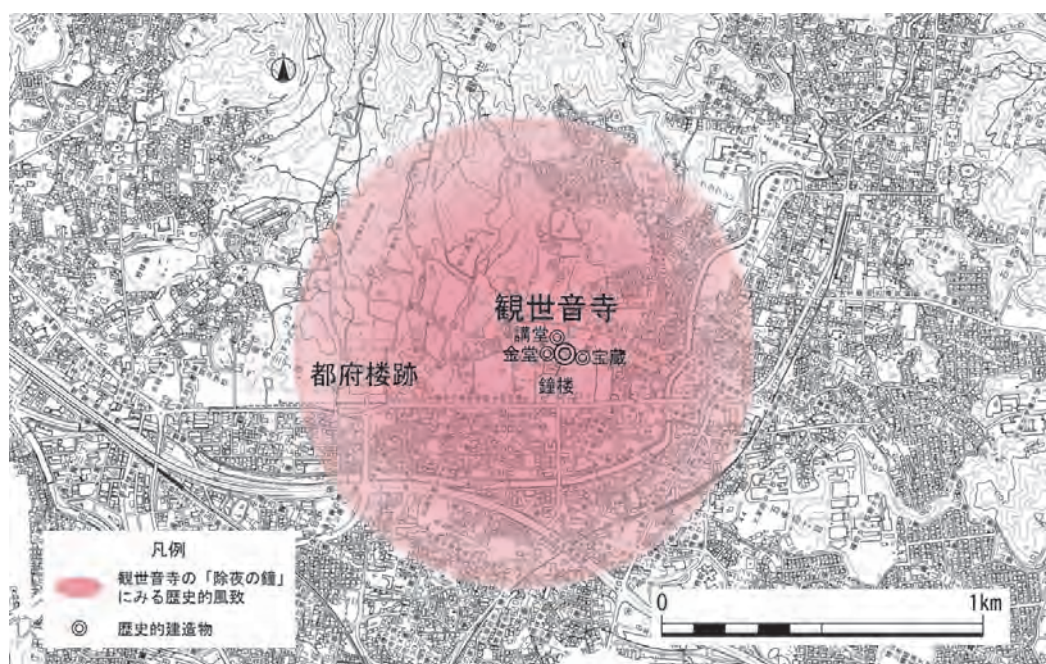
月 31 日の大晦日の夜だけ一般の人も撞くことができる。その様子は度々新聞でも報じられ、昭和 36 年 (1961) 12 月 31 日付け朝日新聞では、除夜の鐘に備え準備する様子も報じている。大晦日の夜には、人々が去り行く年を振り返り、来る年に思いを馳せ、除夜の鐘を撞くために観世音寺へと集まって来る。近年ライトアップされた鐘楼にて、最初に住職が鐘を突き、その後 106 人の参拝客が受付順に撞き、最後に住職が撞き終了する。人々が思いを込めて撞く鐘の音は、古代から続く観世音寺の歴史と菅原道真への思慕と相まって周辺の市街地を厳粛な雰囲気に取り込む。



観世音寺の除夜の鐘

#### (4) まとめ

観世音寺の鐘楼には国宝で日本最古の梵鐘が吊り下がる。大晦日の夜、観世音寺境内は人々の賑わいで活気づく太宰府天満宮とは対照的に、古代の堂宇の礎石群と講堂や金堂が醸し出す古利らしい張り詰めた静けさに包まれ、密かなざわめきと梵鐘の音だけが響きわたる。また、その鐘の音は周辺一帯にも響き渡っており、千年の時を音で伝える唯一無二の歴史的風致である。



観世音寺の「除夜の鐘」にみる歴史的風致の範囲

## 6 農耕に関わる祭事にみる歴史的風致

### (1) はじめに

江戸時代、太宰府には人々の往来が活発な宰府宿や街道筋の集落のほか 11 箇所の農村が散在していた。各集落に伝わる神社は、文化 3 年 (1806) の『筑前国続風土記附録』に記載され、そのいくつかは同年に描かれたとされる『太宰府旧蹟全図北図』にも見ることが出来る。神社では天満天神（菅原道真）をはじめ玉依姫命、埴安神など様々な神々が祀られ、天満宮、八幡宮、宝満宮、日吉宮など多様な神社として存在している。明治初期に編纂された『福岡縣地理全誌』には太宰府の人口の 6 割以上が農業を営んでいたことが記されている。これらの農村集落や神社では農業に関わる多くの祭事が執り行われ、地域の人々のつながりを確認する重要な場となっていた。

### (2) 建造物等

#### <日吉神社>

史跡観世音寺の北側丘陵上に所在し、石鳥居、石段、社殿と続く。祭神は大己貴命。本殿は一間社流造、銅板葺で、17 世紀後半の建築と推測され、昭和 29 年 (1954) に屋根の葺き替えを行っている。拝殿は正面 3 間、側面 2 間、入母屋造妻入の棧瓦葺。大瓶束裏面の墨書から正徳 4 年 (1714) の建立と分かる。本殿・拝殿共に市指定有形文化財。



日吉神社

#### <坂本八幡宮>

坂本集落の南端にあり、特別史跡大宰府跡の一面に位置し東面する。祭神は応神天皇一座。中世末期に勧請されたと伝わる。本殿は石造の切妻造の平入りで、大正 11 年 (1922) の刻銘が残る。本殿前面に昭和 18 年 (1943) 建築の入母屋造の拝殿が建つ。大伴旅人邸の推定地のひとつであることから、近年は元号「令和」ゆかりの地として、参詣者が増えている。



坂本八幡宮

#### <国分天満宮>

国分集落の南端、史跡筑前国分寺跡の一面にあり、境内は西面する。国分のムラ方が奉祀する。祭神は菅原道真。本殿は石造の切妻造平入りで、弘化 4 年 (1847) の刻銘が残る。本殿前面に昭和 39 年 (1964) 建築の切妻造銅板葺の拝殿が建つ。



国分天満宮

### ＜<sup>きぬかけ</sup>衣掛天満宮＞

国分のマチ方が奉祀する。祭神は菅原道真。旧日田街道に面している。本殿は石造の切妻造の平入りで、明治29年(1896)の刻銘が残る。本殿前面に明治40年(1907)建築の切妻造平入りの拝殿が建つ。



衣掛天満宮

### ＜<sup>おいまつ</sup>老松神社＞

水城集落の一画、御笠川に面して所在する。祭神は菅原道真。本殿は石垣基壇上にある石造の入母屋造で、慶応3年(1867)の刻銘が残る。前面には昭和47年(1972)建築のコンクリート造の拝殿が建つ。



老松神社

### ＜<sup>ほうまん</sup>宝満神社＞

吉松集落にあり、祭神は玉依姫命<sup>たまよりひめのみこと</sup>。明治初年に八幡宮が合祀されたため、宝満宮・八幡宮ともいう。拝殿は板札によると明治37年(1904)の建築で、2間×3間の入母屋造の棧瓦葺。本殿は一間社流造の銅板葺で19世紀末建築である。



宝満神社

### ＜<sup>ちろく</sup>地祿神社＞

大佐野の旧集落内にあり、祭神は埴安神<sup>はにやすのかみ</sup>。区画整理事業により敷地が縮小したが、入口には明治9年(1876)の刻銘がある石造の明神鳥居が建ち、一段高い位置に、19世紀末から20世紀初めに建てられた社殿がある。



地祿神社

### ＜<sup>まるやま</sup>丸山神社＞

向佐野の旧集落の南端にあり、祭神は天穂日命<sup>あめのほひのみこと</sup>。本殿は石造で寄棟造の正面に軒唐破風を付ける。明治23年(1890)の刻銘が残る。本殿前面に昭和63年(1988)建築の入母屋造の拝殿が建つ。



丸山神社

### ＜<sup>おうぎ</sup>王城神社＞

かつては四王寺山の<sup>とおのこが</sup>大野城で祀られていたといわれるが、現在は通古賀集落に所在する。祭神は<sup>ことしろぬしのみこと</sup>事代主命。本殿は一間社流造の銅板葺で、石碑によると大正15年(1926)の建築である。前面には昭和56年(1981)再建のコンクリート造の拝殿が建つ。



王城神社



### ＜鹿嶋神社＞

榎区の氏神で、集落の低丘陵上にある。祭神は武甕槌神<sup>たけみかづちのかみ</sup>。大正8年(1919)建立の石鳥居と石段を通ると社殿があり、本殿は一間社流造の銅板葺で、棟札によると昭和13年(1938)の建築である。本殿前面に20世紀中頃建築の拝殿が建つ。



鹿嶋神社

### ＜横岳八幡宮＞

横岳集落の氏神である。拝殿は正面3間、側面4間の切妻造で、その中にある寄棟造とみられる神殿があり、建築様式から江戸時代後期の建築と推測される。拝殿は令和4年(2022)に改修した。拝殿前の嘉永6年(1853)の刻銘がある<sup>こうしんとう</sup>庚申塔には田植え後に苗を供える習慣がある。



横岳八幡宮

### ＜竈門神社＞

宝満山山頂に上宮、山麓の内山集落に下宮が所在する。祭神は玉依姫命<sup>たまよりひめのみこと</sup>。下宮本殿は三間社流造、拝殿は切妻造。『竈門神社社記』によると昭和2年(1927)の建築で、部材は台湾ヒノキを使用する。



竈門神社下宮

### ＜竈門神社遙拝所＞

北谷集落東端にあり、竈門神社新宮ともいう。祭神は玉依姫命<sup>たまよりひめのみこと</sup>。社殿は、本殿が銅板葺の流造、拝殿が銅板葺の入母屋造<sup>いりもやづくり</sup>で、静かな境内には、大正14年(1925)建立の竈門神社遙拝所碑、昭和13年(1938)建立の旗立石などの石造物が並ぶ。



竈門神社遙拝所

### ＜秋葉神社＞

松川区の山中にあり、祭神は火之迦具土神<sup>ひのかぐつちのかみ</sup>。文化年間に勧請<sup>かんじょう</sup>された神社で、本殿は石造の切妻造で、元治2年(1865)の刻銘が残る。前面に明治時代建立の切妻造棧瓦葺の拝殿が建つ。



秋葉神社

### ＜農耕に関わる人々の住宅＞

農耕祭事に関わる人々が住まう集落には、昭和30年代まで広い敷地に主屋・納屋・土蔵などを構える屋敷が多くあった。その主屋は草葺屋根が多く、内部に土間や竈<sup>かまど</sup>を備えるところがほとんどであった。しかし、昭和40年代以降建物の建て替えが進み、かつての面影を残すのは、敷地の片隅に残る土蔵のみとなってきた。

とみながけじゅうたく  
**・富永家住宅**

都府楼跡の東隣にある<sup>つきやま</sup>月山に接して建つ。昭和19年(1944)に芸術家<sup>とみながちやうどう</sup>富永朝堂がアトリエ兼住宅として移り住み「吐月<sup>とげつ</sup>叢<sup>そう</sup>」と呼んだ。建物はL字形に曲がった<sup>まがりや</sup>曲屋で、昭和40年代初頭の写真には草葺屋根がみられるが、現在は銅板葺となっている。



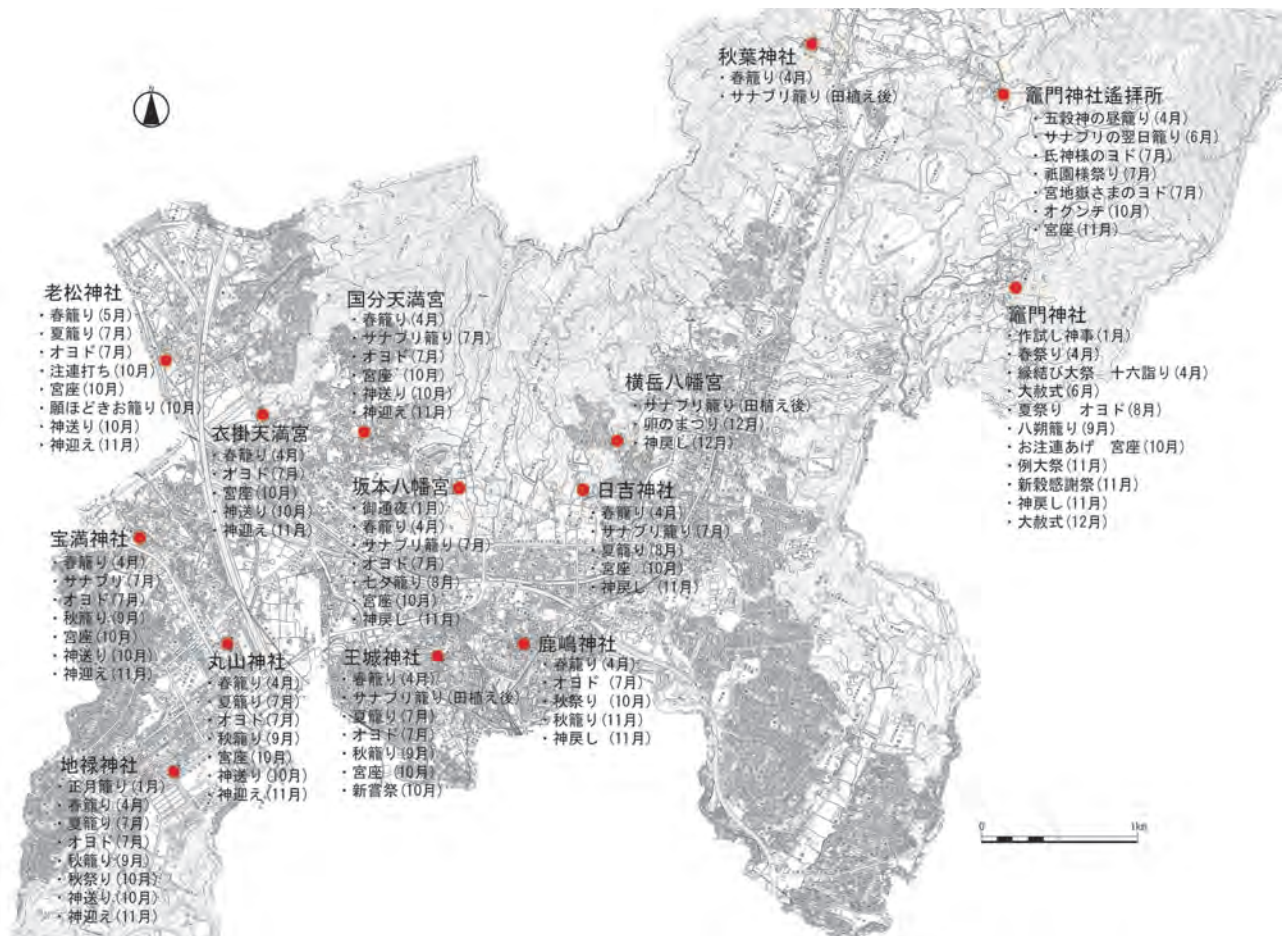
富永家住宅

すやまけもみぐら  
**・陶山家靱蔵**

通古賀集落には今でも屋敷内に蔵を残す家が多い。この靱蔵は大正7年(1918)に建築されたものである(市資料より)。建物構造は平入りの木造平屋建、屋根は切妻造瓦葺、内部は靱を納めるために3部屋に区切ることができる構造となっている。この靱蔵は日田街道に面して建ち、旧街道の歴史的景観形成に寄与している。



陶山家靱蔵



各集落の神社で行われる祭事

### (3) 活動

これらの神社や地域では、以下のような共通して行われている祭事が多い。江戸時代に遡る農作業の過程に沿った春と夏に行うお籠り<sup>こも</sup>と収穫祭の宮座、牛馬の安全祈願で春と秋に行われる水神まつりであるダブリュウ、田植え後の予祝行事であるサナブリ、田耨め、災難・疫除け祈願の夏祭りであるオヨド、神無月にちなむカンオクリ（神送り）、カムムカエ（神迎え）などである。これら一連の行事の中心である宮座は、現在も前述の各神社がある地域で引き継がれている。

#### <宮座>

宮座は、一般的には神社祭祀に携わる組織のことを意味するが、太宰府市をはじめ近隣では神社や地域の祭事のひとつで、神を祀るための座を設け、秋に一年の実りを感謝し翌年の豊穰を願う祭事のこととも宮座と呼ぶ。太宰府のそれぞれの鎮守には宮座帳が伝えられ、行事次第、料理献立、その材料のことなどが詳細に記され、これに基づき当番が中心となって祭事を行う。座員（村落内の氏神などの祭祀を行う集団である宮座の構成員）は村のなかでも限定された人々で構成されていたが、現在では広く集落の人々で行うところもある。

稲刈り後、宮座に先立つ1～2週間前に注連縄<sup>しめなわ</sup>の打ちを行う。注連縄の材料となる稲藁は特別に設定された宮田<sup>みやた</sup>で収穫されたものを使用していたが、現在は当番の水田で収穫された稲藁が使われることが多い。注連縄に使われる稲穂は、稲穂の乾燥・手入れに十分な時間をかけ準備される。手分けして叩いた稲藁を手際よく縄<sup>な</sup>に緋<sup>な</sup>い、本殿のほか祠や庚申塔など集落内で必要な場所への注連縄<sup>なわ</sup>を緋<sup>な</sup>う。また、神饌<sup>しんせん</sup>のひとつとして新米で炊いたご飯を入れるお御供<sup>ごくう</sup>入れも作られる。注連縄は、宮座当日の朝に神殿や石幟などに掛けられる。市の北西部、吉松の集落にある宝満神社では、宮座の一週前に座員で注連打ちが行われる。明治37



坂本地区のダブリュウ



老松神社の宮座



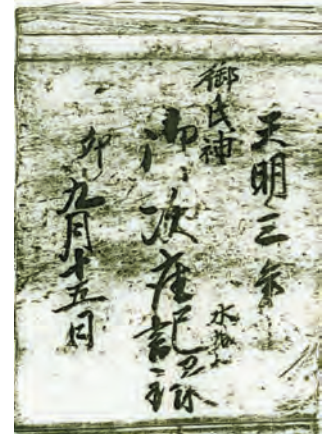
注連縄打ち



宝満神社の宮座のお供え物

年（1904）に建立された拝殿前で力のある者が稲藁を叩き、注連打ちの下準備を整える。

宮座は、当番が神饌などの供物や幟、幔幕等を準備する。その後、座員による鎮守へのお供えがあり、神職による祓いや祝詞奏上などの神事が行われる。その後、お供えを下げ調理し、直会で神人共食が行われる。このこともあり、直会の献立は厳しく決められ、宮座帳に記され、北谷集落の竈門神社遙拝所では毎年の申し合わせにより決定している。また、直会では湯茶事、熨斗事（未婚の女性が三方に熨斗を捧げる）、盃事、さらに当番の受渡しである当渡しが行われる。



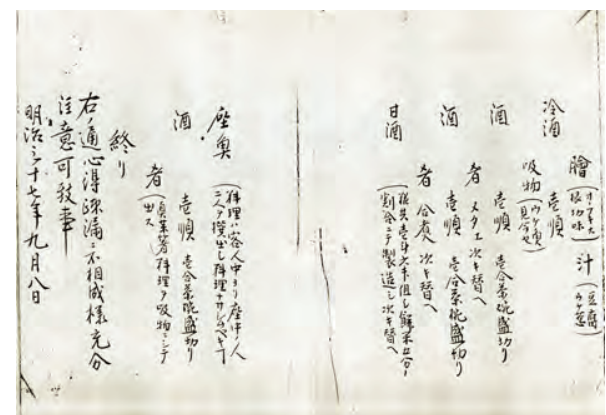
老松宮御宮座帳  
（天明3年～）（個人蔵）

水城集落にある老松神社は、菅原道真が上陸したと伝えられる水城の渡しのある御笠川に面し、慶応3年（1867）建立の石造の本殿が鎮座している。ここには宮座における持ち物、礼儀作法、神饌や直会の献立について記された『御次座記録』（天明3年（1783））があり、現在も宮座記録に基づき準備が進められる。また、当番が保管する祭帳からは、寛文5年（1665）には行われていたことが確認でき、史料的に江戸時代まで遡ることができる宮座でもある。



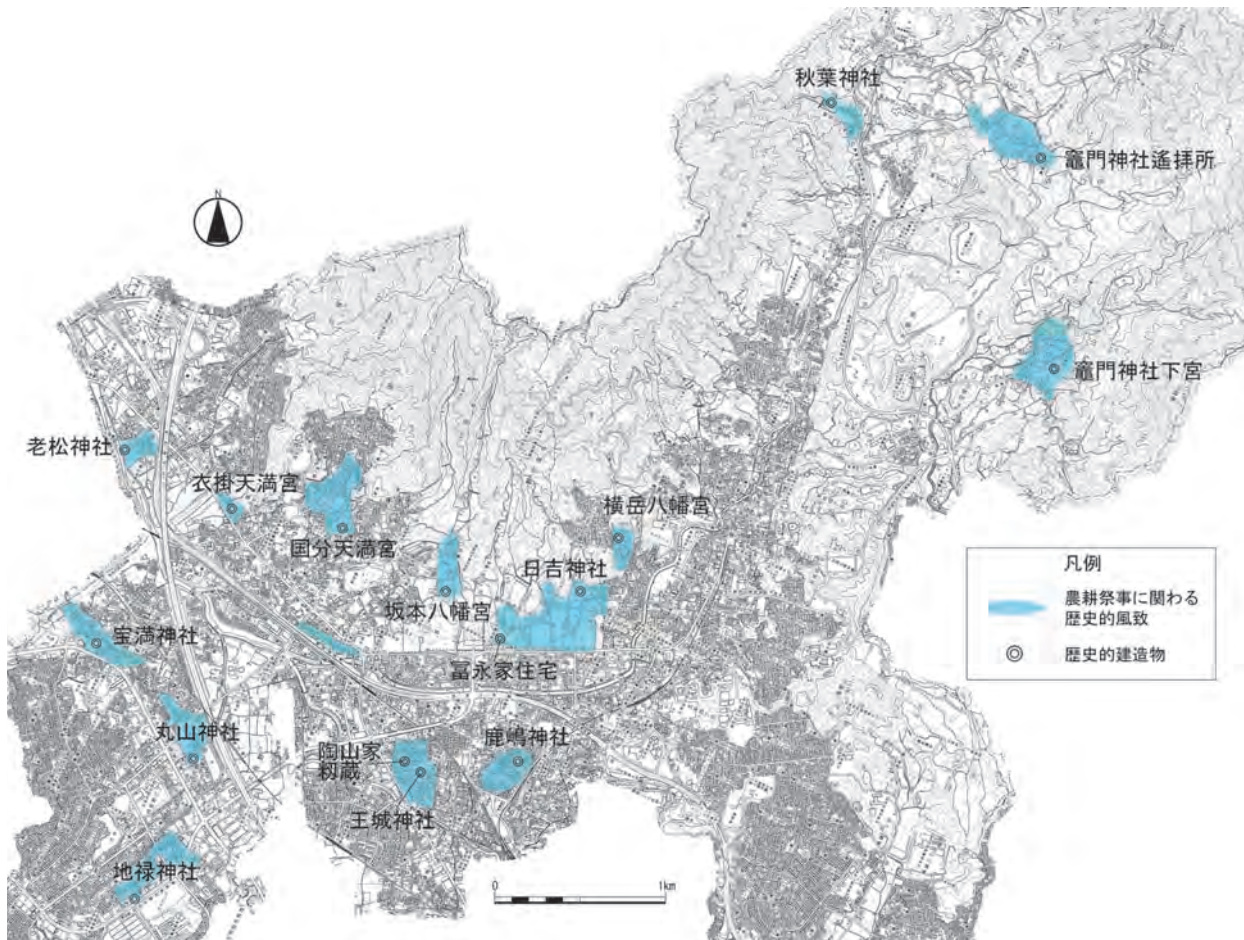
王城神社の宮座行事（真魚箸神事）

また、王城神社には、神人共食の儀礼が「座魚（ざぎょ・ざうお）」という形で伝わる。「座魚」の儀式は、運搬人4名が二人一組で、近くの集会所のおうぎ館から本殿に、包丁、真魚箸（金串）、目の下50cm位の懸鯛を乗せた俎板二組を行列して運び供える。神事の中で行われるお神酒一巡後に神殿から下げ、真魚箸（金串）を用いて決して手を触れずに尾びれの方から鰓まで切れ目を入れる。再び運搬人が定められた所作でおうぎ館へ運び出し、それを吸い物肴とし相嘗（神と食を共にすること）を行っている。



王城神社の神座方法（明治37年）（個人蔵）

現在、太宰府市も市街化が進み、かつての集落は分かりづらくなったが、参詣道から見える富永家住宅や日田街道沿いにある陶山家蔵など、宮座に関わる人々の集落には、今も伝統的な農家建築の住宅や蔵が残されている。



農耕の祭事に関わる歴史的風致の範囲

#### (4) まとめ

太宰府の旧集落では農耕儀礼による年間の諸行事、災厄除けの祈りが、地元の人々により江戸時代以来の鎮守やその周辺で行われている。その中でも宮座は地域にとって季節の節目の祭事であり、宮座に先立ち作られた注連縄は、神社の拝殿や石幟をはじめ境内各所に掛けられ、年間を通して見ることができ、神域の雰囲気<sup>さいやくよ</sup>を醸し出している。また、各集落の路傍ではダブリュウのお供えの水神棚や庚申塔の注連縄などを今なお見ることができる。宮座をはじめとする農耕祭事は、宅地化した太宰府においても、昔ながらの地域の結びつきや農村集落の面影を感じることができる伝統行事であり、かつての農村太宰府らしい歴史的風致である。

## 7 宝満山における歴史的風致

### (1) はじめに

宝満山は、御笠山、竈門山とも呼ばれ、古くから人々の信仰を集めてきた霊山である。天武天皇3年(674)に法相宗の僧である心蓮上人が竈門神社を創建したと伝わる。文献では『竈門山宝満大菩薩記』(鎌倉時代)に「聖武天皇の神亀元年、竈門宮上下宮、同十所王子、香椎社など草創」と神亀元年(724)の草創が伝えられる。奈良時代には大宰



宝満山遠景(南西から)

府が設置され、宝満山はその鬼門を守る神とされ、国家的祭祀が行われた。また、最澄が入唐した際は、宝満山で渡海の安全を祈願した。帰国後に最澄は宝満山に六所宝塔建立を計画した。その後も円仁をはじめ天台宗の高僧が相次いで来山、そして、六所宝塔の建立を経て、宝満山は鎮西の比叡山ともいうべき様相を呈していった。

鎌倉時代になると修験道が導入され、山中に370の坊を擁するまでになったが、南北朝から戦国時代に多くの戦乱に巻き込まれて衰微した。戦国時代末の細川幽斎による『九州道の記』には「むかしは竈門山宝重寺とて山伏の住みけるところに有りけるを、近き年頃より高橋といふ者城郭にこしらえて有りける」と戦乱に巻き込まれた様子が描かれている。

江戸時代には25坊が残り「宝満二十五坊」と呼ばれ入峰修行や加持祈祷を行い人々の信仰を集めていた。明治政府の神仏分離により山伏は一坊を除いて離山させられ、伝統は断たれたように見えたが、下山して永福院住職となっていた南ノ坊51世賢俊は修験道再興に奔走し、大津三井寺の特許状や福岡県知事の許可を得て(『鎮西竈門山入峰伝記』天保12年(1841)書写、明治22年(1889)まで追記あり)、明治22年(1889)には、春峰56名、秋峰40名による峰入りが行われ、明治26年(1893)にも秋峰修行が行われ、人々と結びついた行事として近代にも継続していた。

現在は、宝満山の麓にある竈門神社下宮は内山地区の村落神となり、北谷地区の村落神を祀る社を竈門神社遙拝所とした。

### (2) 建造物

#### <宝満山>

宝満山は、古代の役所大宰府の鬼門の方角とされ、国家的な祭祀の性格等から、古代大宰府との密接な関係をもった信仰の山で、最澄らが入唐する際や帰朝後に参拝を行っている。祭祀は8世紀以降に展開し、9世紀の前半に最も盛んとなり、11世紀まで続いている。

中世には修験の山として発展し、戦国時代に坊中（寺の中心）が山中に移動し、近世を通じて信仰の山として発展した。山中には祭祀跡や堂舎跡、窟、坊跡などの遺構が良好に残る。史跡。

#### ・堂舎跡

宝満山には、山中に堂舎が建築されている。主なものとして、竈門神社下宮の参道南側には、平安時代末から鎌倉時代の梁間2間、桁行5間の身舎に四面庇を巡る梁間2間、桁行7間の堂舎正面に孫廂の付いた平面を有する礎石建物が残る。大門地区においても平安時代後期の礎石建物が検出されている。また、本谷地区では承平3年(933)に造立した六所宝塔と考えられる3間四方の礎石建物が検出されている。



推定六所宝塔跡

#### ・百段ガンギ

西院谷の坊跡中央に残る100段の急勾配の石段で、石段の50段目には大杉が植えられている。天明4年(1784)の『筑前国続風土記附録』には「百段坂」と記録されている。



百段ガンギ

#### <竈門神社上宮>

宝満山山頂の大岩の上に所在し、『竈門神社社記』によると、かつては木造の切妻造の拝殿と入母屋造の本殿が建っていたが、昭和27年(1952)に焼失したため、昭和32年(1957)に現在のコンクリート造の神明造に建て替えられた。



竈門神社上宮

#### <竈門神社下宮>

『竈門神社社記』や「営繕書類」によると、本殿は昭和2年(1927)建築の三間社流造で、拝殿・幣殿は昭和6年(1931)建築で、拝殿は切妻造妻入。部材は台湾ヒノキを使用し、細部の意匠は復古的で、近代和風建築の特徴を持つ。



竈門神社下宮社殿

#### <宝満山の石造鳥居（一の鳥居）>

宝満山の登拝道の途中にある花崗岩製の明神鳥居で、高さは7.37m。延宝7年(1679)の刻銘があり、建立年代や施主が明確な鳥居としては市内で最古のもので、市指定有形文化財となっている。



宝満山の石造鳥居

### ＜<sup>かまどじんじやようはいじよ</sup>竈門神社遙拝所＞

北谷集落の最奥にあり、社殿は、本殿が銅板葺の流造、拝殿が銅板葺の<sup>いりもやづくり</sup>入母屋造で、境内入口には大正14年(1925)建立の「竈門神社遙拝所碑」が建ち、静かな境内には、旗立石(昭和13年(1938)建立)、石幟(昭和30年(1955)建立)、石造鳥居などが並ぶ。



竈門神社遙拝所

### (3) 活動

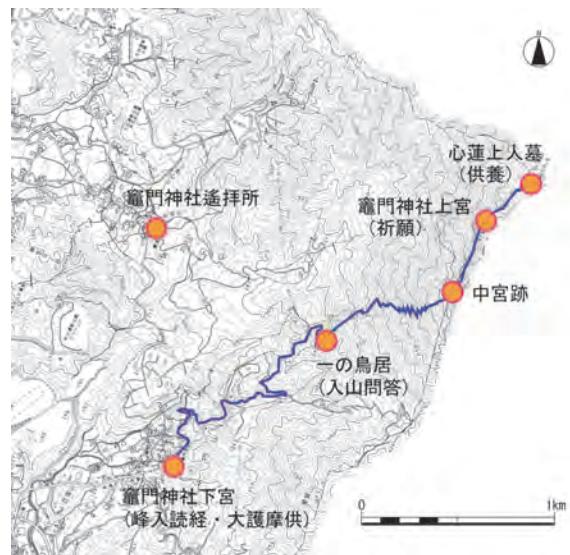
#### ＜<sup>みねい</sup>峰入り＞

峰入りとは、修験道における修行のひとつで、修験者が峰から峰へと渡り歩くものである。

宝満山の峰入りは、寛政2年(1790年)『<sup>かまどやまにゆうぶのきろく</sup>竈門山入峯之記録』などの記録によると、中世以来宝満山の山伏が行ってきた行事で、明治時代に一度途絶えかけたが、昭和3年(1928)に「昭和の御大典」の奉祝として大規模な峰入りが敢行され、その後も本行院などの地元寺院のほか、個人やグループでの登拝修行が継続していた。昭和57年(1982)の宝満山開山<sup>しんれんしょうにん</sup>心蓮上人の1300年遠忌を機に、各地に散った山伏の末孫や、宝満山を修行の場とする人々などによって「宝満山修験会」が結成され、現在では毎年5月の第2日曜日に市民と一緒に入山する峰入り行と同月下旬の<sup>おおごまく</sup>大護摩供が続けられている。

峰入りは竈門神社下宮で山伏装束の修験者と一般参加者が入峰の読経後、登山道を山中へ入り一の鳥居での入峰問答に始まり、道中の石仏や中宮跡で供養を行いながら、<sup>ぶつちやうざん</sup>仏頂山の心蓮上人の祠に詣でて、巨岩に祀られている上宮での参拝、清水が湧く沢や<sup>だいなんくつ</sup>大南窟での入山灌頂などを行う。

採灯<sup>おおごまく</sup>大護摩供は竈門神社下宮で筑前琵琶「竈門山」の奉納で開始され、山伏たちが竈門神社の石段を登ってくる。護摩供の実務を仕切る「奉行」を先頭に<sup>ほらがい</sup>法螺貝を吹きつつ山伏たちが続く。山里で集められたヒノキの枝に覆われた大きな<sup>ごまだん</sup>護摩壇のある周辺で山伏による山伏問答、壇作法に続いて、松明師が<sup>ごまだん</sup>護摩壇の下に松明を差し込み点火する。同時に



峰入りのルート



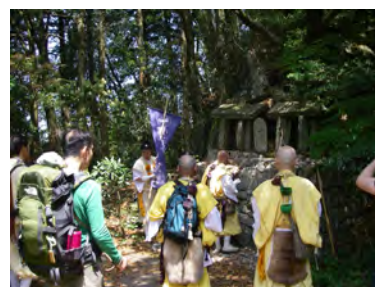
峰入り(明治22年)(写真提供:永福院)



法螺貝ほらがいが吹きたてられ、太鼓が打ち鳴らされ、読経よみぎの音が境内に広がる。やがて護摩壇ごまだんからはもくもくと煙がわきあがり空に昇っていく。人々の願いを書いた添護摩木ごまだんが護摩壇に投げ入れられ、煙が立ち昇る中での読経の後に破壇やぶだんの作法で護摩は終わり一同退場する。続いて火生三昧かしょうざんの行となり、まだ火が残っている燠あきの上を山伏が次々と渡っていく。そして、読経や錫杖の音に包まれた空間のなか、一般の参加者が火渡りを行う。この行で足の裏に感じる熱さは災いや病気に効果があるとされる。



上宮での読経



中宮での読経



心蓮上人祠での読経



火生三昧の行

峰入り、大護摩供時に山伏と行動を共にする登山者は、霊峰宝満山を目の当たりに感じることができる。一方で、日常でも登山道沿道に見る磨崖仏まがいぶつ、巨石の上に建つ上宮は、修験の山、霊峰宝満山の姿を常を感じることもできる空間を提供している。昨今の登山ブームによって宝満山へ訪れる登山者は、身近な山に感じることもない異空間へ立ち入ることによって、日常を忘れ、身の清浄を感じている。

### <宝満山の登山と保全活動>

宝満山は近世せんがいの仙厓などの文人の参詣や近現代の十六詣りなど戦前までは登拝を目的とする登山者が主体であったが、昭和30年代以降は福岡都市圏近郊の山として、レジャーとしての登山者が多く訪れるようになり、現在では年間7万人以上の登山者が訪れるといわれる。宝満山には、龍門神社や北谷、筑紫野市本道寺からの登山道があり、主なもので13ルートが存在している。

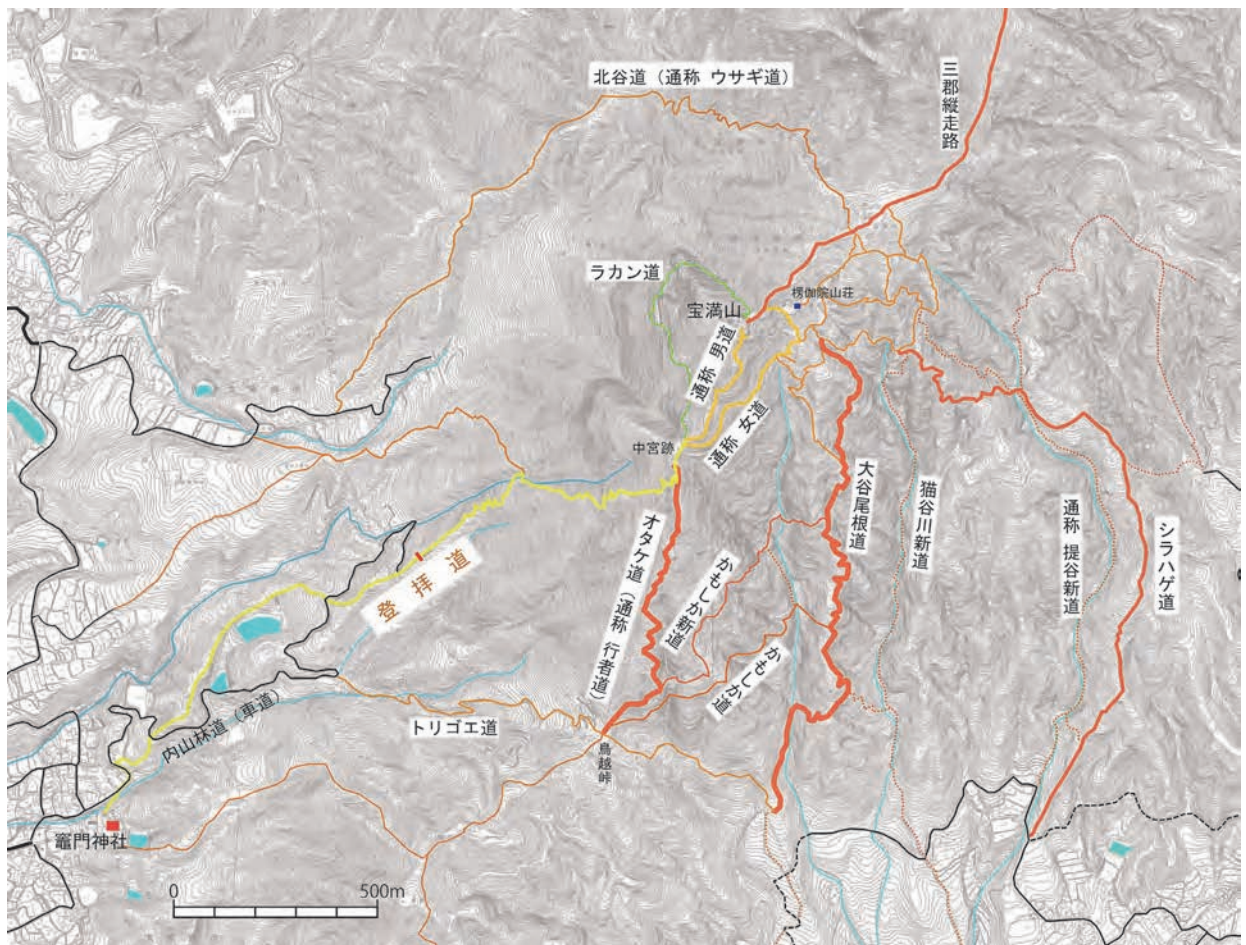


登山客

登山者が増加する中、昭和31年(1956)に福岡かもしか登高会が女性や子供が登りやすい道を造ったことが、昭和31年(1956)7月19日付け西日本新聞に報じられている。また、昭和43年(1968)には東院谷地区の座主跡の平地を利用してプレハブの山小屋りょうがいんさんそう(現：楞伽院山荘)が設置された。平成元年(1989)にはログハウスとしてリニューアルされ、山中で宿泊できる山となった。山小屋の管理を担ったのは昭和43年



登山道の保全活動



宝満山の登山ルート図



羅漢道



男道（左）と女道（右）



登拝道

(1968) に発足した西鉄山友会<sup>にしてつさんゆうかい</sup>である。同会は山小屋のし尿管理（荷下ろしによる廃棄）をはじめ、宝満山全域で登山者へのごみの持ち帰り運動、登山路・石段の維持管理、危険個所のロープ・足場の設置、廃仏毀釈<sup>はいぶつきしゃく</sup>で谷に投棄された石仏の捜索・再設置などの活動が行われていた。平成 20 年（2008）には西日本鉄道株式会社の出資で既存のトイレを改修してバイオトイレを整備した。

宝満山では、自生するツクシシャクナゲを守るため筑紫石楠花倶楽部<sup>つくししゃくなげくらぶ</sup>による保全活動や植樹活動が続けられている。平成 16 年（2004）には、龜門神社下宮の近くに山の図書館が併設された九州登山情報センターができ、宝満山をはじめ山に関する学びや交流の場となっている。平成 25 年（2013）には宝満山弘有<sup>こうゆう</sup>の会が発足し、宝満山の復興と保全活動を

行っている。令和2年(2020)には宝満山山麓の池から山頂を目指すヒキガエルが「宝満山のヒキガエル」として太宰府市民遺産に認定され、宝満山のヒキガエルを守る会が保護活動を行っている。

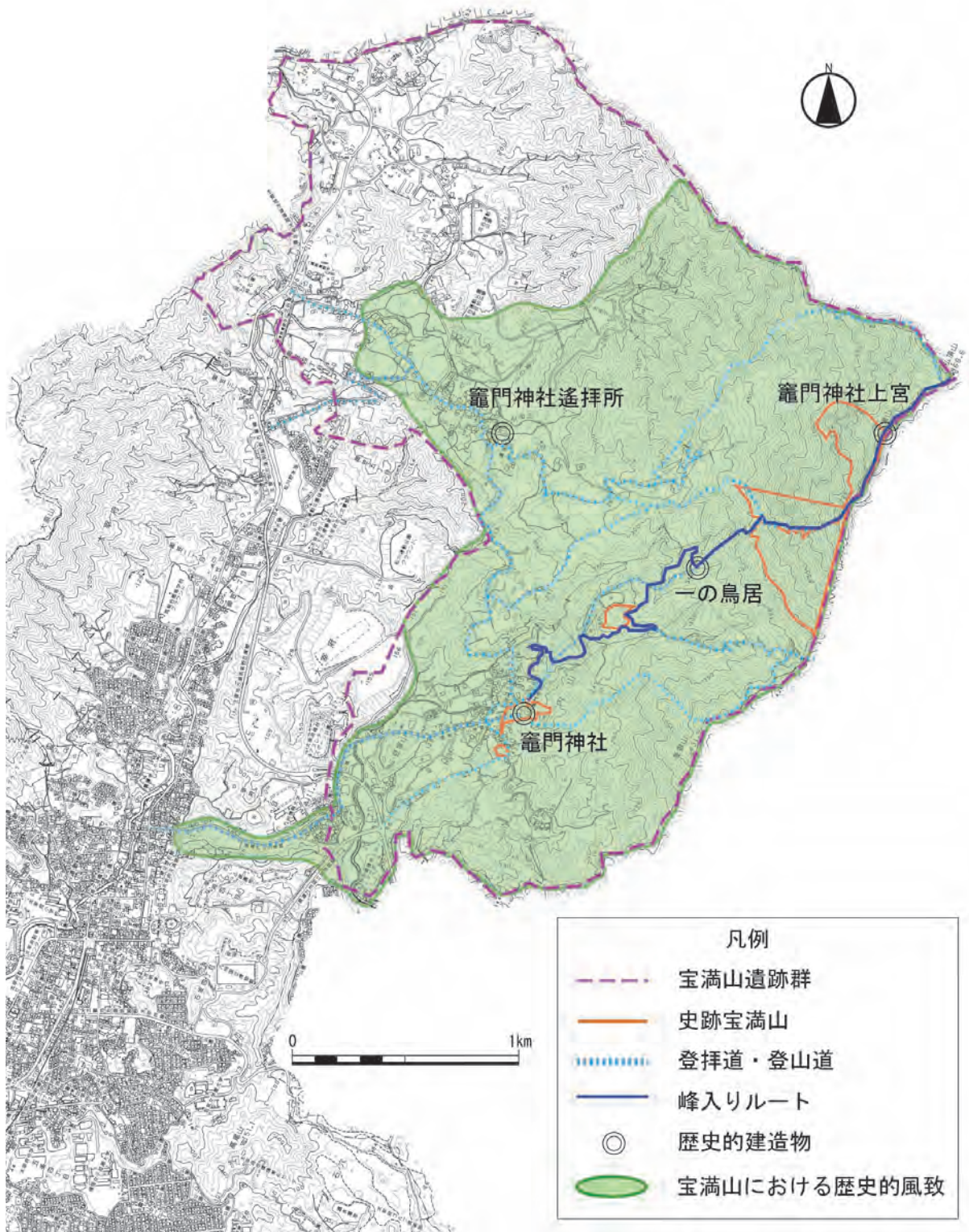
また、日常的に清掃活動が行われており、昭和39年(1964)10月27日付け朝日新聞には福岡山岳会が宝満山で清掃作業を行ったことを報じている。このように多くの人たちが、宝満山を楽しむ傍ら、自らの手で保全していく活動を行っている。

#### (4) まとめ

古来より信仰の山であった宝満山は、宝満山の頂から山裾の内山・北谷集落まで、自然と文化遺産が広がり、歴史と自然が一体となった歴史的景観を作り出している。信仰の山である宝満山は、近代以降かつての登拝道が登山道となり、内山地区からは竈門神社からのルート、北谷地区からは竈門神社遙拝所からのルートがあり、山中ではさらにいくつかのルートに分かれ、山中に残る文化遺産と自然は、ルートごとに違った景色をつくりだし、登山客を楽しませている。これらのルートの一部は、峰入りのルートとも重なっている。現在の峰入りでは竈門神社下宮から一の鳥居・中宮跡・心蓮上人墓を詣でて、上宮で祈願するもので、法螺貝ほらがいの音や祈祷の声が響き渡る。峰入りなどの行事はもちろん、山中に残る建造物や登山道から、霊峰の雰囲気を感じることができる歴史的風致である。



雪化粧の宝満山



宝満山における歴史的風致の範囲

## 8 大宰府関連史跡の継承と保護にみる歴史的風致

### (1) はじめに

大宰府関連史跡とは、大宰府政庁跡など古代日本の歴史を語る上で欠かすことのできない史跡群の総称で、特別史跡3件（大宰府跡、水城跡、大野城跡）、史跡4件（筑前国分寺跡、国分瓦窯跡、大宰府学校院跡、観世音寺境内及び子院跡）が指定されている。大宰府跡の中心施設である政庁跡は都府楼跡として市民に親しまれ、背後の四王寺山には大野城跡があり、博多側には水城跡が横たわる。周囲にも観世音寺や筑前国分寺跡などの史跡が点在し、大宰府市民にとって、史跡は日常生活の中で当たり前のように存在している。

### (2) 建造物等

#### <水城跡>

水城跡は天智天皇3年(664)に大陸からの侵攻に備えて国土防衛のために地峡を塞ぎ造られた、長さ約1.2km、幅約80m、高さ約9mの長大な土塁である。緑に覆われた土塁は、現在も存在感を示し大宰府への入口であることが感じられる。大正2年(1913)に国鉄敷設の際に土塁の一部が削平されたものの、古代から変わらぬ威容を残しており、大正10年(1921)に史跡、昭和28年(1953)に特別史跡に指定された。

現在は東門跡やJR鹿児島本線沿い、西側取付き丘陵部一帯の整備が進み、土塁に茂る樹木も定期的な伐採管理が実施されている。



水城跡



水城大堤碑

#### <水城大堤碑>

大正4年(1915)に大正天皇即位大典を記念して、水城村青年会が水城跡を実測し、水城の歴史と共に石碑に遺そうと発案し建立されたもので、現在も水城東門跡に堂々と立っている。台石は宝満山から、棹石は博多から運搬し造られた。

#### <大野城跡>

大野城は白村江の戦い敗戦後、百済の亡命者の指揮のもと築造された山城で、標高410mの大野山の尾根に沿って土塁を巡らし、谷部には石垣が築かれている。城門は9ヶ所で、城内各所には礎石建物跡が約70棟確



大野城跡の土塁

認められた。また、山中には宝亀5年(774)に四王寺が建立され、山腹にはのちに原八坊と呼ばれた原山という寺院も建立された。昭和28年(1953)には特別史跡に指定された。昭和47年～54年(1972～1979)にかけて環境整備が実施されたが、平成になると豪雨による土塁被害が相次ぎ、その度に修復工事が実施されている。

### <原山記念碑>

四王寺山麓に建立された寺院原山(原八坊<sup>はらはちぼう</sup>)は、南北朝期の戦いにより灰燼に帰し、その後は太宰府天満宮に奉仕することとなった。明治になり神仏分離令により、天満宮からも去ることとなった原山の子孫が、原山の歴史を後世に伝えようと、明治38年(1905)原山本堂跡にこの石碑を建立した。しかし、平成15年(2003)の水害で転倒したため、近くに移設再建された。



原山記念碑

### <大宰府政庁跡(都府楼跡)>

大宰府政庁跡は古代に設置された地方最大の官衙・大宰府の中心である政庁の跡である。菅原道真が配所の南館<sup>なんかん</sup>で賦した「不出門(もんをいはず)」中の一節「都府楼纔看瓦色(都府楼はわずかに瓦色を見る)」から「都府楼<sup>とふろう</sup>」と称されるようになった。昭和43年(1968)に発掘調査が始まり、その成果をもとに平面復元整備されている。中心建物であった正殿跡には地元の人々による顕彰碑が3基建ち、整備された史跡地において先人たちの思いを現代に伝えている。大正10年(1921)に史跡、昭和28年(1953)に特別史跡に指定された。



大宰府政庁跡

### <大宰府政庁正殿跡に建つ顕彰碑>

#### ・都督府古趾碑<sup>ととくふこしひ</sup>

明治4年(1871)建立。歴史に名高い大宰府政庁跡がすっかり荒れ果てた姿に心を痛めていた元観世音寺村庄屋の高原善七郎が建立した。

#### ・太宰府址碑

明治13年(1880)建立。今は礎石を残すのみとなった大宰府政庁跡が、このままでは廃墟となり、湮滅してしまうことを嘆いた御笠郡の人々により建立された碑である。篆額<sup>てんがく</sup>は有栖<sup>ありす</sup>



正殿跡に建つ顕彰碑

がわのみやたるひとしんのう

川宮熾仁親王、碑文は書家日下部鳴鶴が揮毫した。

くさかべめいかく きごう

## ・太宰府碑

大正3年(1914) 建立。撰文は江戸時代中期の儒者亀井南冥であったが、碑文の内容が体制批判とみなされ、建碑は中止された。しかし、志を継いだ弟子たちの手によって、撰文から125年後に建立された。

かめいなんめい

## <筑前国分寺跡>

聖武天皇の勅願により全国に造られた国分寺のひとつ。平安時代末期には廃絶していたと考えられる。塔跡には巨大な塔心礎が残る。大正11年(1922)に史跡に指定され、現在は塔跡・講堂跡・回廊跡が平面整備されている。



筑前国分寺七重塔跡

## <聖武帝勅建筑前国分寺碑>

大正11年(1922)に筑前国分寺跡が国の史跡に指定された。それが国分地区の誉れを再確認する契機となり、昭和3年(1928)、国分寺創建の由縁を不朽のものにしようと国分地区の人々によって筑前国分寺跡の正面に建立された。



聖武帝勅建筑前国分寺碑

## <観世音寺>

観世音寺は天智天皇が母である斉明天皇を供養するために飛鳥時代に発願した寺である。現在、江戸時代に再建された講堂(棟札より元禄元年(1688)建築)、金堂(明治初期の『福岡縣地理全誌』より寛永8年(1631)建築)があり、共に県指定有形文化財(建造物)となっている。また、かつては威容を誇った五重塔の心礎が木々の間にひっそりと残り、講堂周囲には平安時代の礎石が並ぶ。さらに鐘楼には国宝の梵鐘が吊るされている。昭和34年(1959)には観世音寺復興事業の一環として寄棟造の宝蔵が



観世音寺参道

完成し、重要文化財の仏像14体が安置され、往時の規模や歴史を今に伝えている。参道には昭和30年代に復興事業で植栽された樟が並木をなしている。

## <戒壇院>

観世音寺は鑑真和上が逗留していたこともあり、和上が導入した僧尼の受戒に使用す

とうりゅう

る「戒壇」が寺の西側に置かれ、戒壇院とされた。江戸時代に観世音寺から独立し現在に至るが、山門と土塀などに囲まれた境内にある本堂（延宝8年（1680）建築『福岡県の近世社寺建築』1984年より）や鐘楼（棟札より宝永元年（1704）建築）は、昭和の終わり頃になると傷みが激しくなっていたが、多くの人々の浄財により修復が行われた。



戒壇院

### ＜般若寺跡＞

般若寺は、平安時代の「上宮聖徳法王帝説」裏書によると白雉5年（654）に筑紫大宰帥蘇我日向が孝徳天皇の病氣平癒を祈って建立したとされる。諸説あるが、その般若寺は現在の筑紫野市にある塔原廢寺で、大宰府郭内が整備される過程で、現在の般若寺跡に移転したと推定されている。昭和33年（1958）の写真を見ると般若寺跡は草地であったが、現在周辺は宅地化され、塔跡の一部と塔心礎が残されている。市指定史跡。



般若寺跡

### ＜遠賀団印・御笠団印出土地碑＞

古代に筑前国に置かれた軍団の公印が出土した地である。御笠団印は昭和2年（1927）に桑畑で発見された。その直後、水城小学校敷地内で明治32年（1899）に遠賀団印が発見されていたことが判明した。2つの出土地点には、福岡県により標木が建てられ、昭和30年（1955）までに石碑に建て替えられた。なお、発見から100年前経過した現在でも、全国に残る軍団印はこの2点のみである。



軍団印出土地碑

### ＜松倉瓦窯跡＞

平安時代、大宰府の建物に使用される瓦を焼いた窯で、昭和30年（1955）5月17日付け朝日新聞には、宅地造成の際、地権者により4基の登窯が確認されたことが報じられている。窯跡の状況は地権者により記録され、出土品とともに窯跡は保存されている。



松倉瓦窯跡



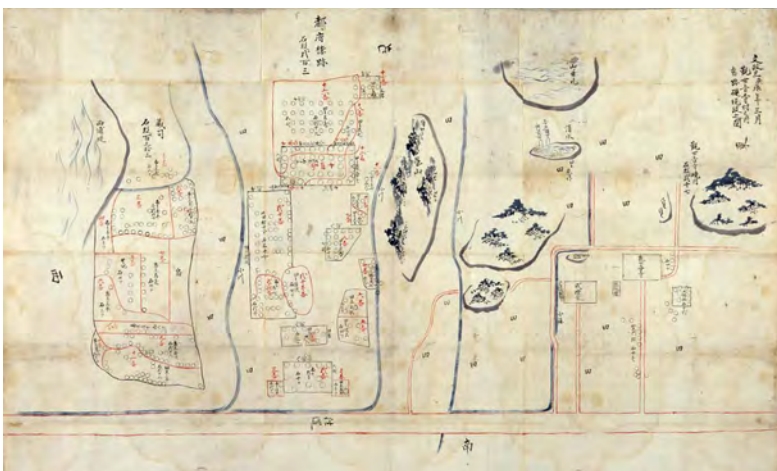
### (3) 活動

#### ① 顕彰と保護活動

##### < 顕彰活動 >

大宰府跡は、太宰府に住む人々によって、古くは天智天皇が築いたものとして、天智天皇の偉業を顕彰し、その証として保護されてきた。

史跡群の保護と継承の記録は、江戸時代から残されている。江戸時代には、福岡藩が長崎勤番の任を受けたことを背景として、寛政5年(1793)に大宰府跡



観世音寺村之内旧跡礎現改之図

(文化3年(1820)福岡市博物館所蔵)

の礎石図が記録されるとともに、礎石紛失を食い止めるために禁令が出された。また、大宰府跡の保護と継承を意図して、藩命による地誌編纂や観世音寺村による「観世音寺村之内旧跡礎現改之図」(文化3年(1820))の作成が行われ、地域遺産の歴史的意味に関する認識を深めることになる。折しも、江戸時代後期に盛んになる「さいふまいり」によって、史跡群が観光資源化し、遊山の地・太宰府としての性格を強めていく。江戸時代末期の紀行文『安楽寺詣日記』(安政4年(1857))には、太宰府天満宮への参拝の後、大宰府跡を訪れた際、「此都府楼の地のみ昔ながらにて礎も動かさでさながら残れるは、いといとありがたきわざなりかし。」と、大宰府跡の正殿に残された礎石と、それが残されていることへの感謝の文章を見ることができる。また、「さいふまいり」の隆盛に呼応するかのよう、町絵師によって史跡群の絵が描かれ、観光資源化が進むと同時に、太宰府に住む人々への継承意識醸成へとつながっていくことになる。

近代に入ると、太宰府に住む人々による史跡継承活動が盛んになる。政庁跡に今も建つ3基の顕彰碑は、大宰府跡の顕彰のため建立されたもので、明治4年(1871)建立の「都府楼古址」碑は、御笠郡乙金村の大庄屋であり、元観世音寺村庄屋の高原善七郎が建立した。次いで明治13年(1880)には「太宰府址」碑が、御笠郡有志の発起によって建立された。残る「太宰府碑」は、大正3年(1914)に亀井南冥門流同志によって建立されたものである。また、政庁跡以外にも、明治38年(1905)には原八坊跡に原山記念碑が、大正8年(1919)には水城跡に「水城大堤之碑」が、大正11年(1922)には筑前



朱雀門礎石

国分寺跡に「聖武帝勅建筑前国分寺碑」が建立されるなど顕彰碑の建立が相次ぎ、郷土の誇る史跡を後世に継承するための活動が人々の中に広がっていく。そして、工事中などに発見された松倉瓦窯跡や朱雀門礎石は現地に保存され、古代の軍団印（御笠団印<sup>みかさだんいん</sup>と遠賀団印<sup>おくだんいん</sup>）の出土地にはそれを記念した石碑が建立された。また、筑前国分尼寺跡や般若寺跡のように、関係する礎石をできる限り由来の地域に残す試みがなされるなど、太宰府の



筑前国分尼寺跡の礎石

住民にとって身近に文化財があり、それらを保護する意識が高かったことを物語っている。特に、大宰府政庁跡周辺においては、住民の間には「都府楼で木を伐るな、穴を掘るな」と言い伝えもあるように、史跡を守ってきたという自負は並々ならぬものがあった。

さらに、史跡継承意識を定着させた活動は、史跡が所在する水城村の小学校で実施された取り組みによる。ひとつは、昭和11年(1936)に、水城尋常高等小学校が取り組んだ『郷土読本』<sup>きょうどどくほん</sup>編纂<sup>へんさん</sup>で、「皇室由来のものが、わが水城村にはある。」とし、先祖代々受け継がれてきた「郷土の誇り」としての史跡群が、「国



郷土読本

(太宰府市文化ふれあい館所蔵)

家の史蹟」であると同時に村の誇りとしての「村の史蹟」へと観念され、子供たちの中に国家の中に位置づけられた「村の誇り」として史跡群が意識づけられていった。「村の誇り」としての史跡群は、子供たちの中に育つとともに、子供たちの家族の中にも溶け込んでいった。水城跡などは、地元の人々にとって、タキモン(薪)採りの「山」として親しんでいた。

### <史跡指定拡大の動き>

昭和30年代後半の高度経済成長期になると、福岡市の南東約16kmに位置する太宰府は、かつて古代に大宰府を置いた地の利が物語るように、現代も高速道路・国道・鉄道などの交通の要衝となり、福岡市のベッドタウンとして宅地開発の波が「村の誇り」「郷土の誇り」として大切に守られてきた史跡群にも押し寄せてきた。周辺の丘陵地や田畑では、これまでにない大規模造成が見られるようになり、史跡群そのものも存亡の危機に瀕し、史跡群を取り巻く人々は私権か史跡保護かの岐路に立たされることになる。福岡県と文化財保護委員会は、開発から史跡を保護するため、昭和41年(1966)10月5日に史跡拡張の申請を行った。これに対し、地元太宰府では「史跡地拡大絶対反対」「拡張反対」のむしろ旗が、太宰府町役場玄関に掲げられた。町役場側も固定資産税の減収と買上補助金の町負担金の増大を招き「史跡貧乏」という状況に陥ることを懸念するようになる。「土地が指定されたら、自分の土地でも思うようにならない」と史跡予定範囲に所有地を持つ人々から、切実な訴えが続いた。話し合いは、日夜つづき、時には天満宮の大樟の間でももたれ

た。しかし、地元の住民に「史跡はいらん」という考えの人はいなかった。それは、長年培われた「郷土の誇り」だったのである。

昭和43年(1968)9月、依然として指定拡張の是非を巡って激しいせめぎあいが続くなか、福岡県教育委員会に奈良国立文化財研究所から藤井功氏が着任した。藤井氏は地元住民と時に酒を酌み交わしながら、考古学の魅力を語り、「発掘調査の作業にあなたたちの力を貸してほしい。」と頭を下げ、反対していた地元の住民の手によって発掘調査が行われることとなった。いざ、発掘調査が始まると、今見えている礎石の下からさらに古い礎石が見つかり、さらに水晶が入った壺(鎮壇具)も見つかった。発掘調査開始当初「掘っても何にも出ない」と言っていた住民は、様々な発見と史跡の大切さを語る藤井氏の情熱により、史跡への理解と愛着を深め、地元の空気は好転していく。そして、申請から4年後の昭和45年(1970)9月、史跡の追加指定が行われた。その後も、発掘調査は続けられ、調査成果も積極的に公開されたため、地元住民に限らず、多くの人たちに「史跡のあるまち大宰府」が浸透していくこととなった。

#### ＜市民による保護と継承活動＞

古代大宰府ゆかりの観世音寺や戒壇院では、昭和34年(1959)に、観世音寺の復興事業が行われ、宝蔵が建設され、金堂や講堂に安置されていた諸仏が市民によって移された。戒壇院では平成6年(1994)に荒廃していた本堂や土塀を寄付によって修理が行われた。

大宰府政庁跡の公有化は、昭和39年(1964)度から進められ、一部私有地の水田が残されるほかは、その多くが公有化されている。公有化され整備された政庁跡は、当初から地元の方々が史跡作業員となって草刈りや樹木の剪定などの維持管理を行っている。これらの作業の原動力は、史跡のあるまちに生まれ育つことで培われた史跡との共存への思いであった。

さらに、史跡を取り巻く人々の中に、大宰府関連史跡を伝える活動が芽生えていく。昭和58年(1983)、財団法人古都大宰府を守る会(現:(公財)古都大宰府保存協会)が九



大宰府史跡第1次調査の発掘調査風景  
(昭和44年(1969)、写真提供:九州歴史資料館)



大宰府政庁跡の清掃活動(昭和40年(1965))  
(写真提供:太宰府市公文書館)



大宰府政庁跡の草刈り作業  
(写真提供:(公財)古都大宰府保存協会)

州歴史資料館と共催で、大宰府の歴史を伝える「大宰府アカデミー」講座を開講した。受講者には、自分たちが史跡の魅力を市民へ伝えたいという熱意が生まれた。この講座受講生が中心となり、「私たちは、素晴らしい古代都市の上に住んでいるのだ」との感動を来訪者へ伝えられたらと、昭和60年(1985)3月18日に大宰府史跡を解説するボランティア組織「大宰府史跡解説員」制度が始まった。37年経過した令和4年(2022)4月1日現在で、78名の史跡解説員が精力的に活動している。

史跡解説員は、数人の人々を先導しながら、各自調べ上げたメモ帳を片手に身振り手振りで大宰府の深い歴史について熱く語ったり、孫ほどの子供たちを相手に質問攻めにあいながらも学校の先生のように大声を出しながらにこやかに対応している。このような解説員による「伝える」「学ぶ」光景は、大宰府関連史跡に限らず市内各所で見かけ、今では大宰府の日常風景となっている。解説を利用される方は、一般観光客や地元の子供たちはもちろん、国土防衛最初の地としての新人研修中の自衛官や修学旅行で来訪する各地の子供たちである。史跡解説員は来訪者の様々な目的に応えるため、史跡群をはじめ大宰府の歴史解説に市内を飛び回っている。その解説数は平成30年(2019)度には、15,696人を数えた。大宰府史跡解説員制度の開始によって、大宰府に関わった人・モノ・自然を伝える活動など様々なボランティア活動が芽生えていく。大宰府におけるボランティア精神の草分けとしても、大宰府史跡解説員制度の開花は、大きな歴史の一頁を飾っている。

平成23年(2011)度に大宰府市歴史文化基本構想の運用開始によって、市域を文化遺産調査ボランティアが独自の視点で調査を行い、その成果が、「文化遺産マップ」「解説パンフ」という形で実体化した。「郷土の誇り」として先人たちから受け継がれてきた史跡群が、今、多くの人々によって次世代へ引き継がれようとしている。

また、明治時代から引き継いできた多くの人々の願いの結実として、平成17年(2005)に九州国立博物館が大宰府に開館した。その誘致の原動力は、大宰府関連史跡を「郷土の誇り」として、その時々の人々の思い、葛藤、活動と共に未来へつなぎたいという住民のエネルギーであった。それを支えてきたのは、史跡とともに共存し、大切に守り続けてきた史跡を取り巻く人々の地道で息の長い活動であった。



大宰府政庁跡で観光客や小学生を案内する史跡解説員 (写真提供：(公財)古都大宰府保存協会)

## ②時の記念日の行事

大正9年(1920)に東京天文台と生活改善同盟会が時の記念日を定め、大正10年(1921)6月10日に全国で記念行事が始められた。大宰府でも時を刻む漏刻台(水時計)が置かれた月山を望む大宰府政庁跡で実施された。その後、毎年、6月10日の早朝、その時々によって異なるが、多くは午前6時に政庁跡正殿前に参集する。かつては、子供たちの時間の大切さに関する意識付けのため、時計を持たずに午前6時に最も近い時刻に政庁跡正殿前に到着した班に対し、ピタリ賞が与えられた。この行事は、水城小学校によって昭和50年代後半まで継続され、一時休止していたが、平成元年(1989)に再開され現在まで続いている。現在でも昔と変わらず、時を大切にする講話と催行の場である大宰府政庁跡の歴史的意義が説かれ、時の記念日の歌や校歌を合唱し、吟詠などの出し物が行われる。



郷土読本に掲載された「時の記念日の行事」



現在の「時の記念日の行事」

## ③秋思祭

昭和42年(1967)に大宰府政庁1300年祭を契機に榎社で始められ、現在は大宰府政庁跡で行われている。旧暦の9月10日(10月上旬)に菅原道真の在位の往時を偲び、御神霊を慰めるために、政庁跡にて舞いや楽曲などを奉納する行事である。政庁跡で始められた頃の昭和47年(1972)の西日本新聞には暗闇に懐中電灯を照らしながら琴の演奏を行う様子が報じられている。



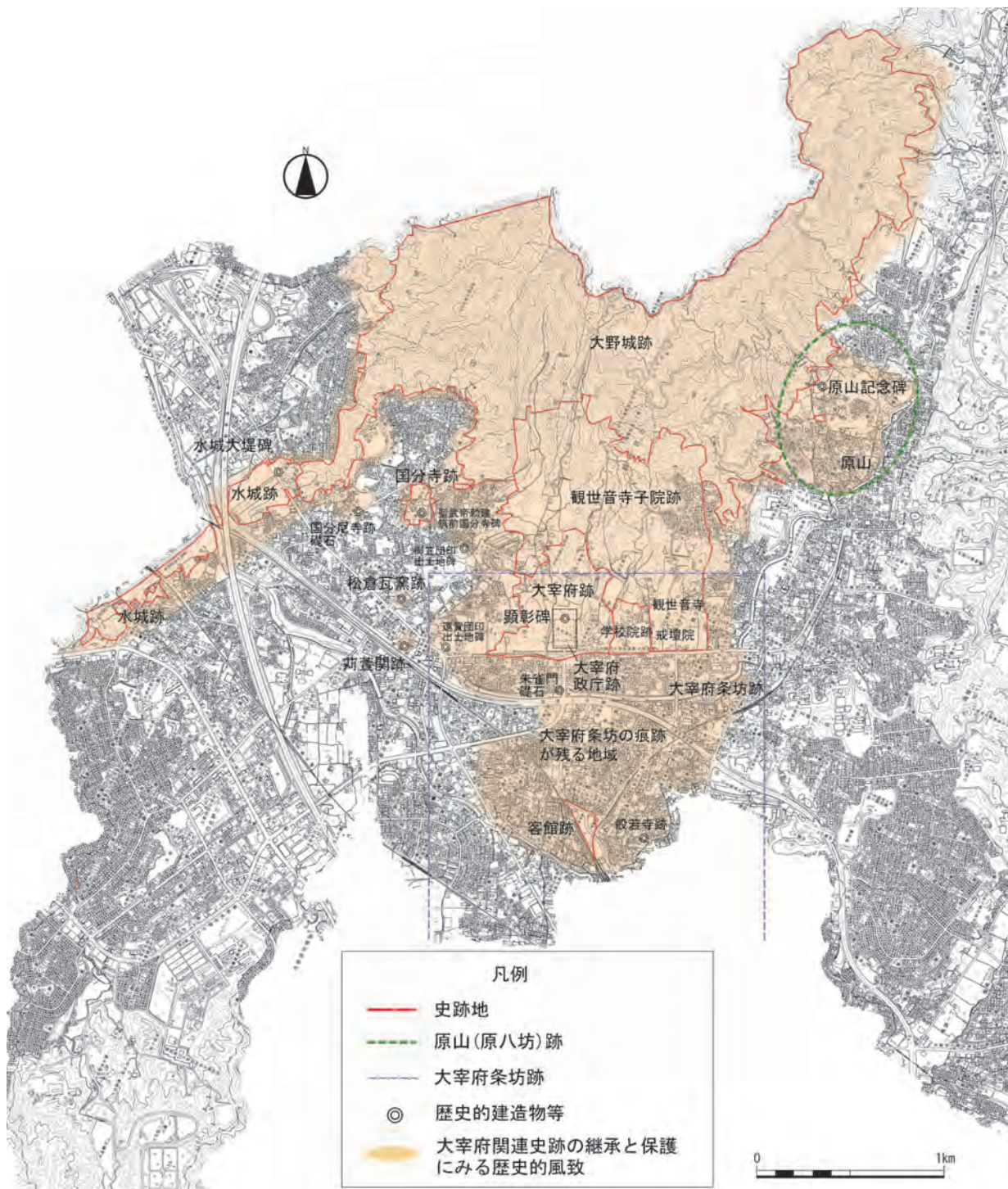
秋思祭

## (4) まとめ

中世から名所として知られるようになった水城跡、大野城跡、大宰府政庁跡、筑前国分寺跡などの古代遺跡は、時代の流れの中で徐々に失われる部分もあったが、藩や地元の保存・顕彰活動により、忘れられることなく、現在に継承され、その思いは古都大宰府保存協会、史跡解説員、維持管理をする人々をはじめ多くの市民に受け継がれ現在に至っている。

る。

現在見ることができる史跡景観は、先人たちの活動から生み出されたものであり、整備された史跡地に建つ3基の石碑のほか、水城大堤碑、原山記念碑などの顕彰碑がある景観は、太宰府を代表する景観となっている。また、それらを史跡解説員が案内している光景は大宰府史跡の保存と継承を象徴する歴史的風致となっている。



大宰府関連史跡の継承と保護にみる歴史的風致の範囲